
不器用な俺。

sprint

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不器用な俺。

【著者名】

ZZマーク

N5685D

spring

【あらすじ】

恋愛にはあまり興味は無かつた陸上部の部長・竜一。だが、そんな竜一も最近一人の後輩の事が気になっていた。どうにかしたいけど、どうしたら良いのかわからない。そんな気持ちをどうするのか・?

プロローグ

俺はいつもと同じよひべッドで考え方をしていた。
寝る前にはなぜか考え事をしている。

俺の名前は斎藤竜一。

中学一年で陸上部に入っている。

自慢じゃないが県大会にも何度か出場した。

だから先輩や先生に期待の眼差しを向けられ、部長になってしまったのである。

俺は人の前に立つて進んで動く、という事が一番苦手なのに・・・。最初に推薦された時点で断れば良いものを成り行きで引き受けてしまった。

この性格のせいでいつも貧乏くじを引いている。

小学校のころから掃除当番や給食当番を頼まれるのは毎度のことだつた。

学級委員もやつたしうさぎの世話をまでやつた。

別にパシられているわけでは無いが友達に頼まれるとどうしても断れない。

今、一番悩んでいる事かもしれないな。

いや？ 一番田か？

俺にもこの性格以上に悩んでいる事があった。

同じ部活の後輩である笹山香織という女子の事がすこく気になつてゐるのだ。

笹山はとても明るく、活発で細かい所に気配りが出来るいい子だ。だが責任感が強すぎて問題を一人で背負い込んでしまう所もある。以前、彼女の悩みを聞いた事があった。しかし、途中で泣き出してしまい俺はあたふたしながらなだめただけだった。

自分でも情けない話だと思う。

彼女は容姿も良く、ほつぺたのちよこちよことした一キビが可愛らしい。

セミロングの髪の毛を二つともひつと結んでいる、いかにもモテるだろう！つて子。

前まではちよっかいかけてくる後輩、としか思わなかつたのだが・・・。

そもそも俺は走る事ばかりでこちらの方面には疎かつたため、昨日姉貴に相談してみた。

「竜~。それってその子の事、好きなんぢゃないの？ つてか絶対そうだつて！ 頑張れ~」
と、軽く流されてしまった。

こんな大事な時に役に立たない姉貴め・・・。
でも少しだけわかつた気がする。

俺は・・・笹山の事が好き・・・？

笹山はただの後輩ぢゃないのか？

気づくと田で追っていたり他の男子部員と話しているとなんとも言えない気持ちに襲われる。

姉貴いわく、この気持ちは「嫉妬」らしい。

そんな事言われてもわかんない。

もう寝てしまおう。明日も朝練あるんだし。

俺は田を閉じるとすぐに眠ってしまった。

次の日。

チュンチュンと雀が鳴き朝田が窓から入ってくる。

いつも設定している携帯電話のアラームで俺は田覚めた。

寝ぼけ眼で顔を洗い、朝食のパンを少しかじって歯を磨くとすぐにシユーズを持ち出発した。

「いってきまーす！」

アラームを鳴らす時間を間違えたため少し遅刻気味だった。

部長が遅れてしまつたらまずい、と思ったが持ち前の足の速さでなんとかセーフ。

俺が肩で息をしていると一人の後輩が近づいて来た。

「先輩！ 遅刻、ギリギリじゃないですかぁ～。また遅くまで考え事してたんですか？」

あの笠山だった。

走ってきたので胸の鼓動は元々激しかったが、なぜだか余計に早くなる。

こいつの田を見ると吸い込まれそうな感覚に陥る。

田を合わせている事が出来ず、つい目線を逸らしてしまう。

「あー、田逸らしましたねえー？ 図星だあー。」

「今日は携帯のアラームが・・・。」

「言い訳禁止ー。や、もう時間ですよ？ 大会は来週なんですから早く練習しましょー。」

確かに大会まであと少しだ。けど理由いろいろ言わせてくれても・・・。
まあ細かい事は気にしないようにしよう。

「練習始めまーす。」

この掛け声とともに今田もまた部活が始まる・・・。

この時はまだ部活が終わった後、あんな事になるなんて思いもしなかつた。

第一話・練習、そして発覚（前書き）

よくわからない気持ちの事を姉に相談すると、竜一は同じ部活の後輩である「笹山香織」の事が好きなのだと姉に言われ、戸惑う。そんな中いつものように部活が始まるが・・・。

第一話・練習、そして発覚

今日は何をしようか。

部活が始まり、俺はメニューを考えながら走っていた。

俺たちの部活の顧問の先生は立派な人だが進路事務のため来れる事が少ない。

隣から副部長の片桐翼が話しかけてくる。

「竜一。今日はどうする?」

「ああ、今考えてた。大会前だし軽めにスタートダッシュにじとくか?」

「そうか。キツくして怪我されたら困るしな。」

翼は俺がとても信頼している俗に「親友」という存在だ。
成績が良く、俺が最も苦手としている数学でいつも90点台を取っている強者。

また普段はメガネをかけていてガリ勉に見えるがそこまで堅苦しい奴ではない。

俺よりも顔は良い方で何回か告白もされているらしい。

こいつも足が速く、種田は違えど俺と一緒に何度も県大会に出場している。

そういうしているうちにアップが終わった。

久々に50mでも計測してみようか。

一年生に計測してもらおうと思い、適役を探す。

やっぱり笹山かな・・・?

あいつ、ちょっと抜けてるよう見えて意外と几帳面だし。
別に笹山ばかりを蠶廻しているつもりは無いが自然とあいつが思い浮かぶ。

「 笹山一。50㍍やるからタイム計つて！」

「 はい！ 部長はまた片桐先輩と計るんですか？」

「 うん。あいつには負けられないからね。」

「 そうですか～。頑張つてくださいね！ ジャ、準備しま～す。」

何気ない会話なのに胸がドキドキして、手に汗まで搔いている。
後輩相手になぜこんなに緊張しているのだろうか・・・？

これが「好き」って事なのか？

つて・・・今は練習に集中しないとな。

元々負けず嫌いな俺だったが 笹山が応援している、というのもあり
余計に負けるわけにはいかなくなつた。

他の一年生にスターーターを任せ、翼と一緒にスタートに着く。

「位置について～・・・よーい。」

「パン！～！」

「 ほほ」一人同時にスタート。

前傾姿勢をとり、徐々に上体を起にしていく。
そして加速。

30m、40m過ぎても隣り合つたままだ。

周りの景色や人がすぐ後ろへ過ぎてゆき、どんどうゴールへと迫つてゆく。

ただひたすらにゴールを目指して走る、俺はこの爽快感が好きなんだ。

そして、ゴール。

するとすぐに笠山が駆け寄ってきた。

「先輩やっぱ速いですね！ほんと同着でしたよ！」

俺に言つてこいるのか翼に言つてこいるのかはわからなかつたが翼が口を開く。

「ふう～。で、笠山。何秒だつた？」

「あ、すみません。えっと斎藤先輩が6、36で片桐先輩が6、38です。」

おひ。勝つた。やつた！

「あ～。負けちまつたかあ。龍一、さすがだな。」

「よし！勝つた！けど翼はやっぱ速いなあ～！」

その後、何本も走つたが俺は負ける事は無かつた。

やがて部活の時間は終わり下校時刻になる。

俺はいつも翼と一緒に帰っているので今日も翼と返る事にした。すると唐突に翼の口から思いがけない言葉が・・・。

「なあ、竜一」。笠山つて、可愛いよな? プロフィールとか見ても可愛らしいし。」

一瞬、言葉を失ってしまった。

「え? ・・・さあ。 ってか、プロフィール?」

「ああ。 最近はやつてるんだってさ。女子だけじゃなく男子にも。」

「と言つて差し出されたのはホームページのURLだった。

「これがそうなのか?」

「まあ、見てみたら? 竜一の携帯でも見れると思つかう。」

「ありがと。帰つたら見てみるよ。」

笠山のプロフィール、か。

・・・・・ 気になる。

けど、なんだ? この気持ちば。

翼が「可愛い」と言つてから心にグサッと来たつて言つのかなん
といつうか。

これも姉貴の言つよつて「嫉妬」なのか?

こんな話をしながら一人は帰路に着いた。

「ただいま。」

俺は家に着くとすぐさま自分の携帯電話を取り出した。

翼からもらった紙に書いてあるURLを携帯に打ち込むと画面を開

く。

「これが・・・プロフィール?」

俺はつい、画面を食い入るように見つめていた。
確かに可愛らしい。

顔文字や絵文字がじりじりに散りばめられているが適度な数で
見やすい。

画面をスクロールしていくとこんな項目が。

「好きな人はのタイプは?」

物凄く気になる。けど見ちゃいけない気もする。

ゅっくじゅっくじとスクロールしていくと画面に表示されていく。

「やっぱり背高くて優しい人かな? けど、優しいだけじゃなくち
ょっと冷たい。みたいな?」

もう正直に言っちゃうと同学年に好きな人いるなあ。」

唚然とした。ただただ驚いた。

なぜだか胸が締め付けられ、肩の力が一気に抜けていく。
急に涙を流して泣きたい衝動にも駆られた。

だがそれを堪え、冷静に考えようとする。

落ち着け、俺。

なぜだ？ 女の子なんだし好きな人がいたって普通の事じゃないか。
ネット上に本当の事なんて書くはずないだろ？
いつもの俺なら「へえ～」くらいに流していたはずだ。

なのになんで俺はこんなに悲しんでいるんだ？
どうしてこんなに切ない気持ちになるんだ？

俺は・・・笛山の事が本当に「好き」だったのか・・・。

これが・・・今までわからなかつた俺の本当の気持ち・・・？

第一話・相談（前書き）

翼から教えてもらつたU.R.を元に竜一は香織のプロフィールへと辿り着く。

しかしそこで見たものは香織には同級生に好きな人がいるという事実だった。

せっかく香織の事が好きだと気づいたのにどん底に落とされた気持ちの竜一は姉にこの事を相談する・・。

第一話・相談

俺は携帯の画面を見ながらじばらボーッとしていた。まるで見てはいけないものを見てしまったような気持ちで。なんでもっと早く自分の気持ちに気づけなかつたんだ・・・。そんな後悔ばかりが押し寄せてくる。自分ではどうしようもないこの気持ち。

また姉貴に相談してみようかな・・・

「竜ーー！ 『はん！ 何度言えばわかるの？？！』母さんが怒り気味に言つてゐる。

まずい、全然聞こえなかつた。

「今、行くー。」

適当に返事をすると、急いで食卓へ向かう。夕飯を食べ終わったら姉貴に言つてみよう。

夕飯は俺の好物のハンバーグステーキだつた。いつもならすぐにむさぼりつくはずだったが、なぜか食欲が無い。適当に食事をすませ、風呂に入ると姉貴の部屋へ行つた。

ドアを軽くノックする。

「姉ちゃん？ また相談したいんだけど・・・いい？」

「いいよ。入つてきな？」

部屋に入ると携帯をいじついていたがそれを置いて話し始めた。

「どうしたの？ 暗い顔して・・・そこ座つて良いから、話してみな？」

「ありがと。この前、相談した後輩の事なんだけど。」

「あの笹山って子ね。あの子がどうかしたの？」

「ちょっとこれ、見て？」

俺はおもむろに携帯を取り出すと先ほどまで見ていた画面を姉貴にも見せる。

「これってプロフじゃん！ 竜の？ 結構可愛いじゃん！」

「俺のじゃなくて！ ・・・ 笹山の。翼に教えてもらつた。」

「あの子のかあ！ で、これがどうしたの？」

「まあ、下まで見てよ。」

姉貴は画面をスクロールして、「あの項目」を見つけた。

「好きな人のタイプつてあるじゃん！ どれどれ・・・。

背高くて優しいけど、たまにちょっと冷たい。こんなギャップいいよね」

「もうちょっとスクロールしてみて。」

「ん？ 正直に言っちゃうと同学年に好きな人いるなあ・・・か。

竜、これ見て凹んだたのね。」

そう言わると少し胸が痛んだ。

俺は何も言つ事が出来ず、ただ俯くだけだった。

少しの間、部屋の中に沈黙が漂つた。

「・・・でもね、竜。ちょっと良い？」

姉貴が優しい口調でかつ真剣な眼差しで閉ざしていた口を開く。
俯いてた顔を上げ、姉貴の目を見た。

「好きになつた子に好きな子がいたらすぐに諦めちやうの？ それ

で簡単に諦めきれるの？

竜がそれでいいなら良いと思うよ。けど私は絶対に後悔すると思う。だって告白もしていないじゃん。その子の事が好きって気づけたのも最近でしょ？

そんなの絶対もつたいないよ。」

一呼吸置くと姉貴は話を続ける。

「私だつて好きな人に好きな人がいるつて知つてたけど、告白した。絶対フランク！つて覚悟してたからすごく怖かった。だけど結果はOKだつたんだよ。

後で聞いてみると途中から最初好きだった子より私の方が気になりだしたんだつて。

こんな風に人の気持ちはいつ、どう変わるかわからないの。だからすぐに諦めるのはまだ早いと思うよ？」

姉貴は話し終えると優しく微笑んでいた。

今までに見た事ないくらい優しい笑顔で俺のことを見つめている。

最後まで話を聞くと自然に涙が一粒、二粒と頬を伝わり床に落ちた。泣くつもりなんて無かつたのに・・・。

今の言葉が心の中で音楽をリピートしているように何度も何度も繰り返され、頬を伝う涙が増える。

必死に涙を堪えようとするとがまたく堪えることが出来ない。むしろ、堪えようとすればするほど涙が流れてくる。

まるで涙を調節する蛇口が破裂してしまったかのように・・・。

俺は・・・。『 』んなに笠山の事が好きだったのか・・・。

そんな事を思つて、『 』に俺の顔は涙でクシャクシャになつていつた。
だが、そんな事はお構いなじとでも言つかのよつて涙は止め処なく
流れる。

すると姉貴がまた話し始めた。

「切ないよね。辛いよね。すくべよくわかるよ。
・・・私もそうだったから。」

もう一度、姉貴の真剣な目を見る。

「でもね、竜。よく聞いて?
キツイ事言つかもしれないけど、今の竜は転んで立ち上がれずに泣
いている子供と同じ。

けど、転んだ子だつていつまでも立ち上がりわないわけじゃない。
傷口は痛いかもしれないけれど、頑張って立ち上がろうとするでし
ょう?

そして立ち上がれた子は少しかもしれないけど前の自分より強くな
つているはず。

お母さんの手を借りてようやく立ち上がる子とは違つてね。
恋愛もそれと同じ。』

俺の目から涙が止まる事はなかつたが、俺は姉貴の話を黙つて聞い

ていた。

「好きな人の好きな人、つていう石につまづいているだけ。竜はその石につまづいたまま泣いているの？ 立ち上がろう、つて努力せずに誰かが助けてくれるまで待ってるの？」

「…だ

「ん？」

「嫌だ…こんな何もせずに終わっちゃうなんて嫌だ…。」

何と言つているかわかりにくかったと思うが姉貴はちゃんと答えてくれた。

「そりでしょ？ だつたら行動しなきや。

告白するなりアピールするなりね？」

「わかった…姉ちゃん、ありがとう…

「いいの。ただし、焦り過ぎないようにね？」

一応大会前なんでしょう？ 告白するにしても大会が終わってからの方が良いと思うな。

「うん、大会終わったらあいつに告白してみる…」

「頑張つてね、応援してるから！ 失恋したつて私が慰めてあげる。相談にもまた乗つてあげるから。ほら、もう泣かないの！ 男の子でしょ？」

姉貴は優しくやつしと何も言わずティッシュを差し出してくれた。

そうだ。泣いてたって何も始まらないんだ。

それにこんなとこ、カツ口悪すぎで見せられないし。
立ち上がらないとな。

俺はそう心に言い聞かせ、立ち上ると姉貴の部屋を後にしようと
する。

その瞬間、俺の携帯電話が鳴り響いた。

第三話・何の知らせ？（前書き）

香織には好きな人がいる。そんな事を知つてしまつた竜一。
この事を姉に相談すると優しく励まされる。そんな時、竜一の携帯
電話が鳴り響くが・・・？

第二話・何の知らせ？

携帯電話が鳴り続けている。

俺はうつとおしく感じつつもその場で携帯を開く。

メールが来る。

・・・ 笹山からだ。

気づかなかつたが翼からのメールもあつた。

(翼のメールから見てみるか。)

そつ思い翼のメールを開く。

「明後日つて部活休みじゃん？ 笹山と一緒に生の女子に遊びに行こうって誘われてるんだけど・・竜一も行く？」

とこう内容だった。

悩む・・・。

笹山もいるんだよな。

横で姉貴が笑いながらこつもの口調で言へ。

「竜、チャンスチャンス！ さっそくアピールできるじゃん！ 即OKだつて！」

先ほどまでの真剣な眼差しはどこへいったのやら。
まあ、感謝してるからいいんだけど……。

問題はこいつちだ。

・・・ 笹山からのメール。

ふとしたきつかけでメアド交換はしていたが用事がある時以外にはメールしないようにしていた。

変に送りすぎて嫌われたら嫌だつたし。

こいつから送るにしても話題が思いつかなかつた。

とつあえず見てみよつ。

22

「片桐先輩からのメール見ましたか？ 明後日なんですけど……。
よければ先輩も一緒に！」

夕飯の時には携帯はリビングにおいてあつたつけ？
そんな事はいい。

急いで明後日の予定を確認する。

(えーっと。 何もない、かな?)

「何もないじやん！ 絶対行つた方が良いくつて！ どうでもいい人ならわざわざ誘わないよ？」

(それもそつか……。 やっぱり行つてみようかな。)

「そっか。とりあえず行ってみるよ。」

翼と笛山にOKの返事を出す。

「よしー。まあ、今日はもう遅いし寝たがり?」

時計を見ると12時半を回っていた。

「もうこんな時間か。。。寝るよ。おやすみ。

「おやすみ。」

「・・・・竜一。頑張つてね。」

そう聞こえた気がした。

眠かったので早めに自分の部屋へ戻る。

部屋に入り携帯を机に置くとすぐにベッドに横たわる。

もつもつ今までの泣き顔は消え、いつの間にか頬は緩みっぱなしになつた。

にやけながら目を瞑る姿は旗から見るとかなり気持ち悪かっただろう。

そんな事を考えつつ明後日の事も考えていると、眠りについた。

夜はすぐに明け、やがて太陽が顔を現す。

朝。誰かがバタバタと動き回る音が聞こえた。

(「うるせえなあ。朝くらい静かにしちよ・・つて今、何時だ?」)

俺は寝ぼけ眼で時計を見る。

8時20分。

よく考えたら今日は土曜日じゃないか。

もう一度寝ようと思ったが、ふとあることを思い出す。

(明日は土曜日ですが朝から練習があります。遅れないように…)

昨日、俺自身がみんなに連絡したんだ。

集合時間は8時30分。

かなりまずい!

慌てて着替えを済ませると食卓へ向かう。

「なんでこんなギリギリまで起きてくれなかつたんだよー!」「母さんに意味の無い抗議をする。

「何言つてるの? 自分で起きないのが悪いんでしょ? ! 田原覚まし鳴つてたじやない!」

当然の反論だ。

でもなんか腑に落ちない。

学生がいる家ではよくある事だろつ。

しかしこんな事を考へている時間はない。

そういうじてている間に5分が過ぎてしまった。

よくよく考えたら今日は顧問が来る日だ。

(あの人怒ると怖いからなあ・・・)

そつ思いつつダッシュで学校へと向かつ。

学校へ向かうまでの間、テレポートが使えればなあと真剣に考えていた。

遅刻しそうになつた経験のある人ならば一度は思つた事があるだろう。

今日ばかりは血腫の足でも間に合わなかつた。

普段3～40分以上かけて通つてゐる道を荷物を持ちながら5分以内に着くなんてほほ無理だらう。

急いでグラウンドに入るともう顧問は来ていて部活も始まつてゐた。早めに荷物を降ろすと、顧問の怒声が耳に入る。

「斎藤！ 部長が遅刻してんじゃねえ！ 自覚あんのか？！」

「すみませんでした！」

「さつ わと入れ！」

「はいっ！－！」

俺は深く頭を下げると慌てて鞄の中に加わる。

翼が多少冷ややかな目線で話しかけてきた。

「竜」「またかよー。昨日もギリギリだる。 最近どうしたんだよ？」

「悪い悪い！ ちょっと昨日は色々あつてな・・・。」「

「はい、言こと訳禁止！ きちんと引っ張つてくれよ。」

「まいはい、わかつたわかつた。」

適当に受け答へると俺は先頭に立つた。

（あれ？ じの台詞どつかで聞いたような・・・？）

ふとそう思こ何気なく後ろを振り向くと笠山がクスクスと笑つている。

やつぱり可愛になーと思つてこの台詞のことを思つて出した。

（やつか。昨日笠山に罵られたんだっけ。）

また胸がドキッとする。

今は部活中だ。

余計なことを考えてたらまた怒られる。

集中しなきゃな。

そう思つたのも束の間。

休憩の時だった。

「先輩・・・ちゅつと良こですか・・・？」

声をかけてきたのは紛れも無くあの笠山だった。

第四話・まさか、まさかの・・・？

「先輩・・・ちょっと良いですか・・・？」

なんだ？

なんでそんなにひつそりと、小声で話しているんだ？
それも人にあまり聞かれないようにしてるみたいだし。

俺、何かしゃつたつけ・・・。

そんな不安が頭の中を駆け巡っている。
でも休憩中とはいえ今は部活中だぞ。

「あ、ああ。別にいいけど・・・。びつした？」

やべえ、変な風に返事しゃつたかも。
胸の鼓動はどんどん早くなり、手に汗も握っている。
冷静な思考が出来なくなつてくる。
覚悟を決めたかのように息を呑む。

笠山が他の人に聞こえない程度に話し始める。

「実は・・・。」

心臓が裂けそうになり、背中に冷や汗まで搔いている。
そんな・・・そんなまさか、ね？

「・・・・・へ？」

「明日の事なんんですけど・・遊園地と映画館とショッピング、ヨリ
がいいですか？！」

それからまでの緊張が一気に解け、つい情けない返事をしてしまつ。何を期待してたんだ？めちゃくちゃカッコ悪い。

「明日、遊園地と映画館とショッピングだつたらどうに行きたいですか？」

「あ、明日かあ。」めん。うーん・・・ 笹山達が行きたいとこでいいよ？

ちゅうどお金は貯まつていたし遊園地のよつに高い出費でもなんとかなる。

「ホントですか？！ やつた！ 遊園地に行きたかったんです！」

「じゃあ遊園地？ 他の一人は平気なの？」

「はい！ みんな遊園地つて言つてて・・・。先輩だけ違つたらどうじょつかと思つましたよ~。」

(いや、みんな同じだつたらさすがに俺でも空氣読むつて・・・) そんな事を思いつつも先ほどの疑問をぶつけでみる。

「笹山、なんださつきから小声なんだ？」

「だつて・・・」「カラッ！ 菅藤、笹山・・・ こつまで話してるとだ！ 始めるぞ！――」

「はい・」

一人同時に返事をすると、笹山が微笑む。

「ひつひつ事ですよ！ 大声で話してると怒られちゃいますし・・・

」

(そういう事だったのか。)

いつも尊敬していた顧問だがこのときばかりは心底恨んだ。
もう少しあと話していたかったなあと嘆いていた。

「今日の練習は200m。昼までに時間があればもう少し他の事をやると思ひ。一組にわかれて行つ事。」

顧問が簡単に説明するとさつそく準備に取り掛かる。

俺のやつてる種目なので内心嬉しい。

専門は400mなのだけど。。。

俺と翼、そのほかの一年は一組田、笠山や他の一年生は一組田に振り分けられた。

「昨日の借りは返させてもらひからな。」

そう翼に言わるとこちらも黙つてはいられない。

「では、スタート5秒前！ 4・3・2・1・スタート！」

一組田が一斉にスタートする。

俺たちの部活は全員揃つても15人いるかいないかなので一組あたりの人数は少ないが。。。

早くも俺と翼はトップに躍り出る。

順調に加速していき良い感じで走る事が出来ているが翼の前に出る事は出来ない。

翼がインコースで俺がアウトコースを走っていた。

どちらが先頭、というわけではないがコース的に俺の方が劣勢になる。

同じ地点からスタートした場合インコースの方が有利なのだ。
(くそつ、やっぱ早いな・・・)

そつ考えながら一生懸命走っていると残り100m地点まで到達する。

翼は専門が100mなため、そのスピードを生かし最初から思いつき飛ばすタイプ。

いつもの調子ならこのあたりで徐々に落ちる、そう踏んでいた俺だったが今日の翼は違った。

なぜか落ちないのだ。

俺は自分でよくわかるほど焦っていた。

翼にも気づかれてしまいそうなほどに・・・。

そんな一瞬の気の迷いが走りに影響したのか翼に先頭を奪われる。このままでは追いつけない、そんな焦りが俺の肩に力を入れてしまう。

そう、走りといつのは肩に力が入ると一気に筋肉が強張って減速してしまつ。

つまりこの時点で俺の負けは決定していたようなもんだ。

案の定、そのまま翼にゴールインされてしまった。

もちろんなんとかして抜かそうと頑張ったわけだが・・・。

後から他の一年が次々にゴールしていく。

「これで借りは返したぜ？」

「ああ、そうだな。」

疲れはいたが一人とも笑顔だった。

結果としては負けてしまったが物事をやり遂げた充実感があった。

これは勝つた翼も同じであるう。

そんな事を考えながら顧問のところへ。

いわゆる「アドバイス」を頂くのだ。

「片桐、今の走りはよかつたぞ。大会でもあれくらい落ちなればいいな。」

「はい。ありがとうございます。」

「斎藤。最後は力が入りすぎていた。あれでは出せる記録も出せなくなってしまうぞ。大会ではそれは無いようにな。」

「はい。気をつけたいと思います。」

二人はそんなアドバイスを貰うと一年生の走りを観賞することに。特に笹山は地区でトップクラスの実力を誇っていたので期待していた。

なんせ二度目の大会でいきなり一位で県大会に出てしまつような子だ。

気にしない方が難しいだろう。

まあ、別に意味で気になるってのもあつたのだが・・・。

それにもう一人見ておきたい子がいた。

筒井綾香。

笹山と仲がよくいつもくつづいている。筒井も地区でトップクラスの実力を持っていた。

二度目の大会で笹山が県大会に出た時、この子は一位だった。ちなみに明日、遊園地に行くもう一人の一年生とは筒井の事だったらしい。

前々から聞いていたが翼の気になつてている人、らしい。

こんな事を思つてゐるうちにスタートしてしまつた。

やはりトップに出たのは一人だった。

あの二人は俺と翼のような関係なのだろう。

先ほどの自分達と同じでお互い一步も譲らない。

そんな調子で150m付近まで来ている。

これも俺と翼と同じ「意地の張り合い」なのかと思った。

だが、どちらも前に出る事は無く同着でゴール。

ひたすら前へ前へと走る二人の姿は凜々しく、美しくとても輝いて見えた。

俺も翼も他の一年生も良いものを見せてもらつたと言わんばかりに
出迎える。

勝ち負けこそなかつたものの一人の顔にも充実感が溢れていた。

その後、何本か続けるとすぐに昏になつた。

午後は軽くミーティングをするとすぐに終わる。

ミーティングの内容は大会までわずかなため、体調管理について。

後、この大会での決意表明のようなものをした。

俺たちの部活では珍しくない事なのだ・・・。

そして帰り際。

今度は翼に呼ばれた。

また明日の事だらうと思っていたが少し様子が違う。

「竜一。ちょっとといいか?」

「・・別にいいけど? なんか深刻そうだな・・」

俺は気になりつつも人気のない公園で翼と落ち合ひつ事にした。

第四話・まさか、まさかの・・・??（後書き）

最後の方、じじ付けっぽく終わらせてしまって申し訳ありません（汗
なおインゴースが有利なのは同じ位置からスタートした場合で実際
の競技場のようにレーンがきちんとしている所では3・4レーンが
走りやすいです。

第五話・またまたお呼び出し？（前書き）

いやなり翼に呼び出された俺！。

翼の話とは・・・？

第五話・またまたお呼び出し？

翼がとても深刻そうな顔をしていたので俺も少し緊張気味だった。

「あのさ。」

「どうした？ 大丈夫か？」

その深刻そうな顔に思わず気遣いの言葉が出る。

「大丈夫。一個聞きたい事があるんだ。」

「いいけど？」

何を言われるかまったく検討がつかなかつた。
まさかこんな事を言われるなんて。

「お前、あの子の事を好きか?」

「実は筒井の事なんだけど……。」「ああ、やつらの子だら? すまじよなー。あの子がどうした?」

いきなり筒井の話が出てくれるだけ。
続けて翼が言いつ。

「えつ？」

「筒井の事をどう思つてゐるか聞いてんの！」

思わず聞き返してしまつた。

翼から筒井の事が気になつてゐるとは聞いたが俺が筒井の事を気にしているなんて言つた覚えはない。

「俺は別・・・本当の事言えよ・・・『まかすんじゃねえ・・・』

否定しよつとした所、翼に物凄い剣幕で遮られてしまつた。
ここまで凄い剣幕で怒る翼は久しぶりに見た。

「だから何も無いって！ いきなりどうしたんだよ？！」
いきなり怒鳴られて理由を聞かない方がおかしいだろう。

「そつか・・・。いきなり怒鳴つて悪かつたな。『ごめん。』
急に冷めた感じに戻り冷静さを取り戻したかのように見えた。

「ちょっと待てよ。お前がいきなり怒鳴るわけないだろ？ 理由を
言えよ。」

昔からの付き合いで。

翼がいきなりキレるような奴じゃない事は俺がよく知つてゐる。
そんな翼が怒鳴つたのだから余計に理由が気になる。
無駄に詮索しない方がよかつたのかもしけないが・・・。

「うるせえな。関係ないだろ？一 もついいー」
こんな言い方をされではこいつちだつて腹が立つ。

「ぬひやくひや 関係あんじやねえかよー 大体あんな風に囁かれた
ら氣になるに決まつてんだりー?」

「だからわこは謝つただろ?ー こかこかこひこひこだよー?」

さすがに俺もキレた。

なむかここまで否定されなければならんのだ?
沸々と怒りがこみ上げてくる。

「ふざけんじやねえー! お前がこきなり聞いてきたんだりー!
お前こわいやうやうやいんだよー!」

「はあ?ー ふざけてるのはやつちの方じやねえかー?ー?」

すでに翼もキレていた。

次の言葉を発しようとしたその瞬間。

バシッ!..

翼の右の拳が俺の左頬に入る。

とつせに田を瞑り、仰け反つたがすぐに体勢を整える。

「痛いじゃねえかよー！」

胸倉を掴み、そう吐き捨てた。

自分の方向に翼の体を引き寄せると膝を上げ、鳩尾の辺りに蹴りを入れる。

多少くの字に曲がるがその程度では堪えない。

今度は俺の腹に目掛けて拳を繰り出してきた。

胸倉を掴んでいたため、避ける術は無くそのまま食らつ。

翼同様、俺も体をくの字に曲げる。

が、俺だってこれくらいじゃ堪えない。

蹴りを繰り出そうとするが先手を取られ、左腿に蹴りが直撃した。

すかさず俺も翼を蹴り飛ばした。

翼はその場に倒れ、尻餅をつく。

このまま立ち上がってきたら、また引つ呑いてやううと思っていたが。

何か言つてきたのでそれは止めにした。

「はあ・・・やっぱ殴り合ひじゃ負けちまうか。竜一、俺が悪かつた。」「めんな。

「ふう・・・口じゅやお前に敵いつこなーな。あのままだと俺が手出した。悪い。」

また、「雨降つて地固まる」とこいつ紅葉の通りだらけ。

「ヒーリング・・・。」

「やつもの事だよな。」

「ああ。」

「やつぱつお前に隠し事出来なーな。」

喧嘩の原因であるこの事だったが聞かずにはいられなかつたのだ。
堪忍したかのように翼が言つと事の経緯を話し始める。

「実は俺、筒井と付き合つてゐるんだ。」

「・・・えええええ！－！－！－！」

ただただ驚くしかなかつた。

筒井と翼が仲良わやへにしてしる所にあまり見てなかつたし
(だつたら翼が告白したのか?)

「でも、それが俺と何の関係があるんだ?」「

「練習の時、ずっと筒井の事見てただろ？」
「この時だけじゃない。」
「何かとお前、筒井の方に近づいてたし。」

「…・・・・・はい?」

（・・・）いくらなんでも誤解しそうだろ？
さつきのは確かに見ていたけど、それはレースを観戦していただけ
で。

正直に書いたやうと見てたのは篠山の方だつたし……。
近づいてみると、それは筒井の前にいる篠山に用があるわけだ。

「誤解だつて！ 確かに見てたけどあれはレースを観戦してただけ

「何もないって！」

翼のあの深刻そうな目は疑っていた目だったのか。

「俺、あいつの事になると見境が無くて。。。本当に『めん！明日
ジュークおごるからさ？！』
ジューク一本で終わらせようとする所が翼らしい。

「はいはい。もうこいつで。明日[あした]戻るなよ～？」
「了解！ つてかー、竜一は好きな子とかいないの？」

(ドキッ。)

一瞬、翼から目を逸らす。

だがそれもバレていたようだった。

「おーー。とうとう竜一にもーー。まあ、やじすめ笛山あたりだと思

うナビ～。」

(なんでだ？！ 翼に言つた覚えは無いぞ？)

「竜一くぅ～ん？ 焦りすぎですよ～？ バレバレなんだつて！-！ 翼が猫なで声で俺をからかつてくれる。

(あの凄まじい剣幕はい、ついでーー。)

密かにそう思いながら俺も堪忍したようになつ。

「わかったよ！ 笛山のことが好きなんだよー。」

すかさず翼が突っ込みを入れた。

「やつぱり～？ 顔真っ赤ですよー？」

「馬鹿ー。お前に殴られたからだよー。」

とつ方に言つ返すが無駄であった。

「「めん！ でも俺、片方しか殴つてないし～。まあ、笛山可愛いもんな。頑張れ～。」

(つたぐ。急に調子づきやがつて・・・)

心の中で舌打ちをした。

まあ、なぜか顔が火照っていたのは本当なのだが。

「じゃあ帰るづけ? 明日は10時に駅だぞ? また遅刻しないようになー。じゃー!」

「あれはアラームが! ・・いいや。じゃあなー。」

短く別れの挨拶をすると家に着く。

あまりにも疲れていたため、すぐに風呂に入るとそのまま寝てしまった。

この時はまだ明日、あんな事になるなんて思いもしなかった。

第六話・ひつじのお化け屋敷

朝。俺は飛び起きた。

昨日、一昨日のように遅刻してはたまらない。

9時。駅までは大体15分くらいと見て平氣だりつ。
この時間なら余裕で間に合つた。

早めに朝の身支度を済ませる。

後は洋服、か。

自分のセンスにあまり自信が無かつた。

派手なものは好きじゃないし。

笹山もいるんだし、どうせなら良く見られたい。

そう試行錯誤しながら選んだのだが。

黒系のジーンズに白のタートルネックのニット、その上に茶系の皮
製ジャケット。

アクセサリーはあまり好きではないので、腕にブレスレットを二つ
しただけ。

他人から見たら極々普通の服装だと思つが変に目立つよういいだろ
う。

最後に髪の毛を軽くチェック。

ワックスも好きではない。

俺は基本的にキャラキャラした服装が嫌いだ。

みんな揃つてそんな服装ばっかりするのが理解出来ない。
(寝癖は立つてないな。)

そう確認するといよいよ駅へと出発する。

歩いている間、何回も時計を確認した。
今度こそ遅刻したくなかったからだ。
危ないとは思っていたが…。

そんな事をしているうちに駅へ着いた。
(10分前。大丈夫そうだな。)

エスカレーターに乗り、待ち合わせ場所であった券売機の前の柱へ
行く。
昨日、寝ている時にメールが来て知られたので少し忘れかけてい
た。

その柱の近くまで行くとすでに全員来ているではないか。
少し焦つて小走りに皆のところへ急ぐ。

「今日は遅刻しなかつたみたいだな。」

翼が時計を見ながら言つ。

「ホントだ！ 今日はよろしくお願ひします」

女子一人が同じタイミングで言つ。

「俺だつて毎日遅刻はしないって。こちらこそよろしく！」

「じゃあ、出発しましょ？」

早く早くーとも言いたいのだろうか笠山が嬉しそうに言つ。

彼女の嬉しそうな笑顔にまたしても胸の鼓動が早くなるのを感じた。

切符を買い、電車に乗り込む。

今から行く遊園地は電車で約一時間つてとこだ。

それまでの間、俺たちは他愛無い話で盛り上がった。

勉強の事や、部活の事や、顧問の愚痴や……。
迷惑にならないように小声で話すよう注意したりすると「保護者」

みたいだと笑われてしまった。

そんなやり取りを楽しんでこむとすぐ目的地に着く。

いかにも「遊園地」らしい遊園地だ。

ループのある高くて長いジンジャースター。
ゆっくりと回りながら町を見下ろす観覧車。
おどりおどりしい雰囲気のお化け屋敷。

遊園地の定番であるアトラクションが田立つ。

久しぶりに来たためつい、圧倒されてしまつ。

「先輩！ 何してんですか？ 置いてっちゃいますよ？」

「悪い悪い。って・・ちょっと待てよー！」

置いていかれると言われて本当に置いていかれるとは思わなかつた。
いつも場で女子のハイテンションには驚かされる。

「まずはこれでしょー！」

筒井が指差す。

「綾香好きだよねー。 も、行きましょー！」

一人の視線の先にはわらわのお化け屋敷があつた。
わらわ中に入らうとする翼が小声で耳打ちしてきた。

「竜ー、ピッてカッ「悪い」と見せるなよー。」

「つるせえー、お前こそー。」

翼の顔を振り払つて逃げる。

簡単なやり取りを交わしていると隣から急に話しかけられた。

「お客様、通路が大変狭くなつておつますので」注意トセー

血まみれの白衣を着たナースらしき係員。
中はどうやら「廃病院」という設定らしい。
入り口から入り、靈安室を目指すといつくりだそうだ。
基本的に一本道なので迷う事は無いとの事。
適当に頷くといよいよ中へと入る。

確かに通路が狭い。

俺と笠山を置いていつてしまつかのように翼と筒井はどんどん進んでいく。

(やついえば翼もいつこの好きだったっけ……)

そんな事を思い出しているうちに中が暗かつた事もあり一人を見失つてしまつた。
と、いう事は……？

笠山と二人きり。

心臓がはちきれんばかりに脈打つ。

「あら、一人とも行っちゃいましたね。ま、仲良しの一人はそつ

としどいて行きましょ 」

暗くてよく見えなかつたが満面の笑みを浮かべている気がした。

奥へ進むと笠山が何か踏みつけてしまつたようだ。
慌てて下を見るとそれは真つ赤に染められた手。
作り物とはいえ、良く出来ている。

冷静に苦笑していた俺とは違ひ笠山はかなり驚いたようだ。

「きやー！」

「なんだ、笠山は怖いの苦手か？」

「そんな事無いですよー！」

必死に否定するが顔に出でている。

本当は怖いのだろう。

俺も別の意味でドキドキしているが。

その手を後にし、さらに奥へ進む。

なぜか不自然な場所にロッカーが置いてある。
(ははー。ここから飛び出してくるんだらうな。)

そう高をくくつてロッカーの先へ進もうとする。
しかし、ロッカーからは何も出でこない。

その奥からゾンビらしき人が飛び出してきた。

これには俺も驚いた。

遊園地側の策略にまんまとまつてしまつたのだ。

「つねつー！」

「きやー！」

一人でゾンビの横を駆け抜けると病室のドアが描かれている通路に

出た。

何気に「トリックアート」らしい。

「怖かつた。 いきなり出でてくるんだもんー。」
この時、右手の違和感に気がつく。

(ん? 僕、何か持つてたつけ?)
ふと見てみるとなんとそこには笠山の左手が。
しかもがっちらりと握られている。

(え? え? え? これっていいの?!)
心臓が破裂してしまいそうになる。
思いつきり叫んでしまいそうにもなった。
冷静な判断が出来ない。

「や、や、笠山? て、手・・・いいの?」
「えつ? ジ、ごめんなさい!」

手に気づくとパツと離す。

薄暗い中お互いに顔を真っ赤にして、目を逸らす。
しばらくの間、そんな状態で奥へと進んでいると笠山が口を開いた。

「……怖いからせっぱつ手、握つても良いですか・・?」

「・・うん。」

思わぬ返答にまた心臓が破裂しそうになるが深く頷く。
向ひつもかなり恥ずかしそうだ。

「じゃ、じゃあ行ひつか?」

「は、はい。」

手を軽く握り合ひついで奥へと進む。

もはやお化け屋敷の怖さよりも篠山と手を握つて歩いている、という状況の方が怖い。

今度はたくさんの壊れたベッドが並ぶ、病室のよつな場所へ出た。
奥に行くにはここを突つ切らなければならぬ。
いかにも何か丑い的な雰囲気だったので俺も篠山も歩く早さを上げた。

と、そのとき。

壊れて誰もこないはずのベッドから何かが這い出してきて壁を上
げている。

「あや～！～！」

笹山が「あき声をかき消すほど」の声を上げる。
とにかく「こ」をダッシュで突つ切つた。

普段、走りなれているはずの一人だったが息を切らしている。
病室をようやく抜けると更衣室のような所に出た。

・・・ロッカーがたくさんある。
ロッカーがトラウマになりそうだ。
「こ」も急いで突つ切りとする。

ガタガタガタツ！！

二つか三つ、ロッカーが動き出す。
俺が笹山の手を引き、「こ」を抜ける。

いつたい靈安室にはいつになつたら着くのだろうか。

そんな事を考えていると田の前に「靈安室」の文字が。
何も無いただの廊下だったので普通に歩く。

「ようやく『ホールだな。』
「怖かつた。」

そんな風に安心していた。

が、しかし。

トリックアートだと思つていたドアが一斉に開き、ゾンビが出た。

俺も笹山も思わず声を上げる。

「うわーー！」

「あやーーーーー！」

早めに駆け抜けようと小走りに靈安室の前まで行くと首筋に冷たいものが。

定番のこんにゃくだ。

いつもなら笑つて終わるがそんな余裕は一人には無い。

「あやーー！　あやーーーーー！」

笹山が叫ぶ。

何かが腕に必死にしがみついてくる。

靈安室のドアを開けると明かりが眩しい。

まだ笹山は目を瞑つているようだ。

俺はずつとしがみ付かれている事に気がつかず、今になつて慌てふためいた。

「ほ、ほら。もう外だぞ？　つ、翼たちの所に行こひつ。」

お化け屋敷だけで死んでしまいそうだ。

「え？　あっ・・・せ、先輩！　何度もごめんなさい。」
またパツと離れたが手は未だに握つたままだった。

外に出ると翼と筒井が待ちくたびれたとでも言わんばかりの田線を送ってきた。

が、俺たちの「異変」に気がつくとすぐここにやけた翼が耳打ちしてからかってくる。

「竜一ー！ ちやっかり手繋いでるじゃんか！ いい感じー！」

反論する気にもなれなかつた。

このまま心筋梗塞か何かで死んでしまいそうな感じだつた。

筒井が次のアトラクションを指差す。

次に指差したものとは・・・？

第六話・ひらくお化け屋敷（後書き）

またありきたりで申し訳ありません。
手繋ぐのとこにやくはやりたかつたんです（笑）
もう少し遊園地編が続きます。

第七話・沈黙の果てに・・・。

筒井が指差した先には・・・。

思わず呆然としてしまったジョットゴースターがあった。実のところ、俺は絶叫系のアトラクションが大の苦手だ。翼も苦手だと聞いている。

先ほど賛成したのは筒井に言われたからであろう。どうにかしてこの状況を避けたい。

「筒井？ 昼飯食べてからにしないか？」

時計を見ると12時半。

ちょいとお腹時だ。

「ああ～。俺も腹減つてきたな。そうしないか？ 綾香～。いつの間にか名前で呼んでいる事に気がついたが指摘しないであげよ。」

「うへん・・・まあ、いつかあ。」

笹山も無言で頷く。

先ほどの恐怖がまだ拭いきれていないのか、未だに俺の手を握つたままだ。

それが幸か不幸かはわからないがとても体に悪い事は確かだ。ずっと心臓はドキドキしたままだし、背中に変な汗を搔いている。

俺たちはとりあえず近くにあったフードコートへ向かう事にした。適当に昼食を買つと空いている席へ腰を下ろす。

くだらない談笑をしながら盛り上がる。

さすがの笹山も恐怖を拭いきれたようだ。

そんな談笑をしながらあまり知らなかつた筒井の事も徐々にわかつてきた。

俺のイメージではいつも笹山の後ろにいる大人しい感じの子。けど、それは部活に真剣に取り組んでいるだけで本当はずごく明るい。

むしろ笹山を引っ張つていいくような感じらしい。

背は比較的小さくて、髪型はショート。

容姿はまあまあだが私服のセンスが良い。

翼が言うには大きくてつぶらな瞳で見つめられると死にそうになるとの事。

・・・溺愛するのもいい加減にしろと言いたい。

ちなみに笹山の私服がとても似合つていて可愛くみえたのは内緒だ。

昼食も食べ終わり、適度な休憩も終わつた。

すると待つてましたと言わんばかりに筒井が言ひ。

「じゃ、ジョット「ースター乗りましょ！」

複雑な気持ちだったがみんな行くと言つ中、一人反対するのは・・・。

ところより「反対出来ない雰囲気になつていた。

嫌々ジェットコースターの乗り口まで行く。

笠山と筒井は絶叫系が大好きらしく、一番前に乗りこんだ。俺たちはその後ろに乗らざるを得ない状況になってしまふ。

安全装置を下ろし、コースターは出発する。

よくよく考えると毎を食べた後なんて余計に気持ち悪くなるじゃないか。

自分でも馬鹿な事をしたと思う。

なんて考えていてもあざ笑つかのよひに「一スターは頂点へと登つていいく。

(ああ……ついにこの瞬間が……)

頂点へたどり着いたと思つた途端、急降下が始まる。体が浮くかのようなフワッとした感覚に襲われる。必死に声を出さないよう堪えた。

が、しかしそんな努力もループに差し掛かると無情に消え去る事となる。

歓喜の叫びか恐怖の叫びかはわからないが周りから幾度と無く叫び声が聞こえる。

前の二人はさーつと「キャーー」だとか「楽しい～！」とか言つて
いる。

これのビデオが楽しいのだろうか・・・。

ループの先端に着くと多少スピードが落ちるがまたしても急降下。

思わず翼と叫んでしまつた。

「うわーっ……」

その後、5分間ほどコースターは走り続け、ようやく止まつた。

もうこんな乗り物一度と乗りたくない…とつぐづぐ思った。
が、そんな思いは女子一人には届くはずもなく。

この先一時間半ほど二人の好きな絶叫系に付き合わされる羽田になつてしまつたのだ。

彼女に「テレテレの翼と断りきれない俺ではしようがない。

本当はもう少ししつき合わされそつだつたのだがそれに拍車をかけた
のは翼だつた。

「なあ、二人とも…。もう少しで日が暮れ始めるぞ? そろそろ
最後にして、最後くらい絶叫系以外にしないか…?」

苦手な絶叫マシンに散々付き合わされた俺たちはまるで死んだ魚。

「やつかあ。じゃあ、最後はやっぱアレでしょ!」

笹山と筒井が一ヵ一ヵしながらパンフレットの地図を見る。

どうやら観覧車に乗りたいようだ。

これなら少しゆっくり出来そうだな、と俺たち二人はホッと安堵の
息を漏らす。

すると女子一人が何かヒソヒソと話していた。

良く見ると筒井が何かを笹山にお願いしている。

それをしうがないなあ、と言わんばかりにOKする笹山を見ると

筒井は大喜びしていた。

クタクタになりながら観覧車の乗り場まで行くと今度は翼が俺に小声で

「竜一、頼む！ 俺と綾香で乗せてくれ！ あいつ、観覧車に好きな人と乗るのが夢だつたみたいで……。お願ひ！」

と言われた。

こんなとき、ついついいつも悪い所が出てしまう。

ましてや親友の翼の頼みだ。

断りきれるわけがない。

「仕方ないなあ。わかつたよ。愛しの筒井さん達には何も言わなくていいのか？」

断らぬかわりに少し嫌味っぽく言つ。

「さつき一人で話していただろ？ あれがそうだつたみたいだから大丈夫！」

そういうしている間に順番が来る。

先に翼たちが乗り込むと翼が俺に言つ。

「頑張れよ！！」

つい、大声で反論したくなつたがそのときにまもつ gonddora に乗つて一人で手を振つていた。

軽く舌打ちをするとすぐに俺たちの gonddora も来る。

二人で中に入り、丁度斜めになるように座ると係りの人人がドアを閉めてくれた。

しばらく沈黙が続く。

何か話しかけなければ、と焦る俺だったが先に笠山が口を開いた。

「あの。今日は本当にありがとうございました！」

「ああ、大丈夫大丈夫。楽しかったし。」

少し間を空けてからもう一度口を開く。

「後、ずっと手握ったままですみませんでした！..」

夕日で顔が赤くなっているのか恥ずかしいのかわからなかつたが笠山の顔は真っ赤だった。

「あ・・。別にいいよ。お化け屋敷も結構楽しかったし・・

俺も思わず顔が赤くなり、目を逸らしてしまつ。

会話が続かない。

ゴンドラの中で二人きり。

さらに会話が続かないというのはとても気まずいものだ。頭の中で色々と考えるがどれもパツとしないものばかり。

そんなもどかしい思いをしているとまた笠山に先を越されてしまつた。

「せ、先輩。と、隣座つてもいいですか・・・？」

思わぬ言葉にたじろぐ。

とても頑張って発した言葉のよつに聞こえた。
だが俺には驚くことしか出来なかつた。

「・・う、うん。いいよ。」

胸の高鳴りは最高潮になり、冷や汗もたくさん出てくる。
お化け屋敷以来、なんか積極的というか大胆と言つか・・・。

たまたま手を繋いでしまった時点で氣絶してしまったのに・
・・。

好きな人が自分の隣に。

ましてやこんな狭いゴンドラの中。

一人の距離なんて1mも無く、せいぜい3~40cmくらいだらう。

本当に発狂してしまったのだ。

必死に窓の外に映る綺麗な夕日とそれに照らされる街を見るがまつたく気が紛れない。

「夕日、綺麗だな。」

この状況を打破するにはやはり会話しか無いと考え、無い頭をフルに使って考えた言葉だ。

「はい、とても綺麗ですよね。」

だよな、と言おうと思いつか少し振り返るとこの近距離で田田が思いつきり合ってしまった。

慌てて顔を元の位置に戻し、また夕日に田田を向ける。

そろそろゴンドラは頂点に達しそうだ。

また次の言葉を考えていたところ、今度は笠山がゆっくりと話し始める。

「先輩は・・私のこと、嫌いなんですか・・・？」

今までのどの言葉よりも大胆で衝撃的で。

俺が一度も見たことが無かつたとしても、とても悲しい目をしていた。

今にも泣き出しそうな・・・俺が一番見たくなかつた目。

それはゴンドラが一度一番上に来た時の事だった・・・。

第七話・沈黙の果てに・・・（後書き）

一気に二人の距離が縮まっちゃいました（笑）
こう見ると翼と綾香はかなりのバカップルですね^ ^;
毎度毎度ありきたりな内容で申し訳ありません（汗

第八話・悲しき誤解

なぜだ、なぜそんな悲しそうな顔をするんだ。

「「」、「」めんなさい……いきなり変な」と聞こちやつて……。」

必死に作り笑いをして誤魔化そうとしている。

しかしその姿はとても痛々しく誰が見ても見破る事の出来る笑い方だった。

好きな人が目の前で悲しそうな顔をして居るのに俺はどうすれば良いのかわからない。

優しい言葉をかけてあげる事も出来ず、ただ近づいてくる地上を眺める事しか出来ない。

そんな情けない自分がとても不甲斐なく感じた。

「「」、「こんな事どうでもいいですよね……。」

(嫌いなわけないじゃねえかよ・・俺にひとつは重要なんだよ。)

「・・かよ。」

「えつ?」

重く閉ぢていた口をよつやく開くことが出来た。

「 笹山の事・・・嫌いなわけないじゃねえかよ・・・。」

うまく言ひ事が出来ず、聞き取りにくい声になってしまった。
それだけならまだしも言ひ方にどこか棘のある、とても冷たい声だ
った。

そんな声であつても笹山はしっかりと返答してくれた。

「 だつたら、なんで・・・？」

何かを思いつめたようなそんな感じで問いかけてくる。
そのときだつた。

笹山の目から先ほどまですつと堪えていたであらう、大粒の涙が零
れ落ちたのは。

「 なんでいつも私の方をきちんと見てくれないんですか・・・?
一度零れ落ちてしまつた涙は止まる事無く流れ出す。」

「いつもいつも先輩は私と顔を合わせるたびにそっぽ向いたり目を逸らしたり・・・」

逸らしだけ・・・

もひの壁で御聴かれていた。

俺は好きな子を泣かせてしまったんだ。
そんな間違った嫌悪が急に襲い掛かつてくる。

「片桐先輩や綾香の時は真っ直ぐに田を見て話しているのに私の時は違つて・・・ひつくなつて・・・ひつくなる。だから・・・私だけ先輩に嫌われちゃつてるのかつて思つて・・・えぐつ。」

ヒカルに泣くとき独特のしゃっくりのような感じが入る。

思わず声を荒げてしまつ。

俺には「いつて否定するしかなかつたんだ。

「俺は・・・」

（嫌いだから逸らすんじゃなくて、好きだから呑わせられないんだ
よ・・・）

言おうとした瞬間、無情にもゴンドラの扉が開かれる。

「「J利用ありがとうございました。」

係員の営業スマイルが飛んできた。

余計なお世話だ。

まじでやこんなときだ、空氣くらいうんで欲しい。

俺たちは無言のままゴンドラを後にすると、先に降りて待っていた
翼たちの元へと向かつた。

二人とも俺たちの尋常ではない雰囲気を察してくれて変に詮索され
ることは無かつた。

しかし詮索されなかつたとはいえ氣まずい雰囲気である事には変わ

りない。

すぐに遊園地を後にするとい、この雰囲気のままそれぞれ帰宅していった。

わざと着替え、そのほかには何もせずにベッドへと先ほどの状況から早く逃げ出すかのように。

目を瞑つてこのまま消えてしまいたい気分だった。

俺の何気ない行動が笠山の事をあんなにも傷つけているなんて。

「先輩は・・私のこと、嫌いなんですか・・・?」

「なんでいつも私の方を見てくれないんですか・・・?」

「片桐先輩や綾香の時は真っ直ぐに目を見て話しているのに私の時は違つて・・・ひつく。
だから・・・私だけ先輩に嫌われちゃってるのかって思つて・・・
えぐつ。」

あの必死に作った作り笑いが。

あの今にも泣き出しそうな目が。

あの涙が零れ落ちて止まらなくなってしまった泣き顔が。

走馬灯のように俺の中を駆け巡る。

心が痛む。

ドキドキするのではなく心臓を抉り取られるような感じ。

俺は・・・ 笹山の事が好きなのに・・・。

嫌いなわけ、ないのに・・・。

第八話・悲しき誤解（後書き）

読後感が非常に悪くて申し訳ありませんへへ；

告白は大会が終わってから！つて勝手に決めちゃつて（え

大会は小説の中で見て明後日になります。

多少もどかしい感じはあるかもしませんがもうしばらくの辛抱を

・・。

第九話・決意

気がつくとすでに朝になっていた。
どうやらあのまま眠つていたようだ。

最悪に目覚めが悪い。

誰かに睡眠を妨害されたわけではないが嫌な気持ちだ。

昨日のことが嫌でも思い出される。

頭の中から拭い去ることが出来ないのだ。

顔を洗つたり、朝食を済ませたりすれば楽になるだろうと思つたが
そうはいかない。

いつもより暗い足取りで学校へと向かつ。

今日は前のよつに遅刻はしなかつたもののみんな集まつていた。

笹山も・・・。

昨日、あれだけ言われたのに極力近づかないよつにしてしまつた。
向こにも俺になるべく近づかないよつにしてるのが窺える。

お互に視線を合わせよつとしない。

そんなことが積み重なり、さらに氣まずい雰囲気になつていつた。
田を見てしまつてどうもあの悲しそうな田が浮かんでくる。

なんでの時言ひことが出来なかつたんだ。

そんな後悔が押し寄せてくる。

あの時、言つことが出来ていればこんな風にはならなかつたかもしれないのに・・・。

こんなことを考えながら、朝連や授業をこなす。

午後は専ら明日の連絡。

俺がそこまでグイグイと引っ張らなくても大丈夫だった。しかし何をやつたのかまったく頭に入つていらない。どうしたらしいのか朝から午後まで考えていた。

そして、一つの結論にたどり着く。

(やつぱり言えなかつたといふ、伝えた方がいいよな・・・。)

大会終わつたらきちんと伝えよ、と心に決めた。
その大会は明日なのだが・・・。
あいにく自分ではなんと言つていいのかわからない始末。
相変わらず情けない。

(また姉貴に? 最近相談してばつかだし・・・。)

翼の馴れ初め話でも聞いて参考にしてみるか。
あの様子だとまた彼女自慢かなんかに発展しそうだけど。

「翼？　お前たちって、どんな風に告白したの？」

「ああ、俺が告つてOKしてもらつたの。・・・聞きたい？」

いかにも聞いてくれとこいつをしている。

「うん、お願い。」

「どうせ参考にしたいとか思つてたんだ？　わかつてゐて。」

（うつ・うつ・図星。でもこの発言、そつとうつ血信が無いことこえないよな・・・）

細かい部分は気にしないでおこひ。

「えつと、部活終わった後に呼び出したんだよ。ちょっと来て?つて。もちろん誰にも気づかれないようにな。で、人がいないことを確認したんだ。そして告白。確か自分の思つたままに伝えたと思う。『好きです！付き合つて下さい！』ってな感じで・・・」

予想通り、そこから延々と筒井との話が始まりそうだったので切らせてもらつた。

「そつか。ありがとな。」

「最後まで聞いてくれればいいのにー。まあ、参考にしてくれよ。

(自分の思ったままに云える、か・・・)

頭の中で何度も繰り返しながら家に帰った。

風呂の中でも夕飯を食べている時もずっと言葉を考えていた。

もうりんごいつも考え方をするべつででも。

(明日は大会なんだから早く寝なきゃダメだな)

俺はそう考えると眠りこづく。

明日が忘れる」との出来ない日にならうとは思わなかつた・・・。

第九話・決意（後書き）

いよいよ大会になりました。
もうそろそろこの小説も終盤となります。
最後まで読んで下さると光栄です^ ^

第十話・それぞれの戦い

いよいよ大会当日。

さすがの俺でも今日は遅刻しなかった。

とにかく大会当日に部長が遅刻なんてしたら大問題だらう。

学校のトラックとはまったく違つ赤い、きちんと整備の整つているトラック。

俺はここを思いつきり駆け抜ける。

目指すは一位。

今までの成果を出すまでだ。

本番まではまだ時間があるので入念にアップを済ませる。
専門種目である400mは勝ち取らなければ・・・。
顧問や他の先生方から散々期待の眼差しを浴びせられているのだから。

そんなプレッシャーが重く圧し掛かる。

だがそれに負けないで記録を出すのが強い選手だ。
落ち着いて深呼吸をしてリラックス。

翼は100m。

笹山・筒井は200m。

(みんな頑張るんだから俺も頑張らないとな。俺は出来るー)
心にそう決め暗示をかける。

スパイクという武器を持ちユーフォームといつ鎧をまとった、己の「戦場」へと向かった。

召集を済ませ集中しながらストレッチ。

俺が走るのは4組あるうち1組目の4レーン。とても良い位置だ。

速い人が前の方の組に振り分けられ、速い人から順に内側のレーンから入るからだ。

自分のレーンのスタートティングブロックを合わせ、時が過ぎるのを待つ。

そしてついに・・・。

「行います。位置について。」

お願いしまーす！と大きな声が響く。

「よーい」

少し間が空く。

俺はこの間が大嫌いだ。

緊張がピークに達する。

パンツ！…！

白い煙とともにピストルの音が鳴り響き、一斉にスタート。

一步一歩確実に前へと進む。

最初のコーナーの部分は一瞬で終わり、直線へと入る。

先ほどのコーナーと同じ直線でスピードに乗らないと後が厳しい。走る前はそんな心配をしていたがうまくスピードに乗ることができる順調に加速。

横一列に並んでいたがそれを大きく突き放す。
大抵、このあたりからみんな徐々に苦しくなってくる。
ちなみに300m付近までスピードを保つ事が出来るのが俺のところ。

全員突き放す事が出来たと思ったが一人、隣にいた。
肩に力を入れないように前へと出ようとするが向こうもついてくる。
コーナーでずっと競り合っているといよいよ最後の直線に入る。

ここからが400mの一一番キツイ所だ。

足に乳酸が溜まり、パンパンになる。

常に腕も振っているので腕にも乳酸が溜まり体が鉛のように重くなってしまつ。

この直線に入つてもまだ競つたままだ。
向こうが焦つてゐるのがわかつた。

だが、ここで自分も焦つては翼の時の二の舞だ。

ゴールまでの距離が50m、40m、30mと短くなるにつれて応援も一層激しくなる。

ラスト20mほどだらうか。

痺れを切らしたのか向こうが軽く前に出るがすぐに落ちた。
気づけば俺の後ろへと。

このまま行けば一位。

ヘロヘロになるが氣力と根性で走る。

5m。4、3、2、残り1m。

そして、ゴール。

止まつた途端、思わずその場に倒れてしまふ。
体を動かす事がままならない。

しばらく呼吸が整わなかつたが少しづつ喜びがこみ上げてくる。
思い切り叫びたいがそんな元気は無い。

グラウンドに一礼してコースから外れると顧問やみんなが温かく出迎えてくれた。

最初に声をかけてくれたのは翼だ。

「おめでとう。凄かつたな。」

肩にポンと手を置き、笑いかけてくる。

次に声をかけてくれたのは笛山と筒井だった。

「一位おめでとう！」わーこめす！ めちゃくちゃ格好よかったですよ
！…！」

笛山も昨日までの氣まぎれなど忘れ、激励してくれる。

そして顧問の先生から一言。

「よく頑張った。おめでとう。これからもより精進するよ！」な。
」

普段は厳しい人だが優しく微笑みかけてくれた。

(やうだ、翼たちの試合は？)

三人に聞くと100mも200mも俺がアップしていくうちに終わ
つたとの事。

「さ、三人とも結果は？」

「全員県大会…！」

笹山と筒井が丶サインを向ける。

が、ほぼ同時に翼が不服そうに言う。

「俺は一位だつたけどな。一人抜かせなかつた。」

すると筒井もつられたように

「私もですよ！　また香織に抜かれちゃいましたー。」

と少し膨れつ面になりながら笹山とじられる。

多少の悔いはあつたかもしけないがみんな笑顔だった。

結果報告をし終えると他の試合を観戦することに。

あの選手は速いだの今の選手は凄かつただの一人前に言いながら。

そういうしていると閉会式。

どこかのお偉いさんの挨拶をみんなかつたるそこに聞き流すと閉会式は終わった。

みんなの戦いはここで終わりだが俺にはやるべき事が残つてゐる。

武器を改め、勇気と正直な気持ちを武器にまた新たな「戦場」へと。

「笛山、ちょっと話があるんだけど・・・来て？」

第十話・それぞれの戦い（後書き）

大会終わりましたー。次はいよいよ！

バレンタインに更新できるよう努力しますので^^
新たな「戦い」の結果はいかに・・・？

第十一話・告白

「はい・・・わかりました。」

この間の事を思い出したかのように田を逸らしながら四つ。

俺は笛山を連れて競技場の裏へと向かった。

競技場の裏側なんてよほどの物好きじゃない限り誰か来る事は無い。
少し原っぱになつてているが木々が多いため周りからじろじろ
と見られる心配も無い。

お互に正面を向くつて立ち並んでいた。

まるで決闘でもするかのような雰囲気。

が、二人とも田を合わせる事は無い。

視点が定まらず、空や地面をボーッと見つめるだけ。

「この沈黙はとても長く感じられた。」

そしてついにこの沈黙を切り裂くように笛山が声を発した。

「この間の事ですよ・・ね？　あの時は本当に混乱して・・すみませんでした。」

俯くよつに軽く礼をする。

「ああ・・実はあの時、ちやんと言えなかつた事があるんだ。」

大きく唾液を飲み込む。

頭が真っ白になつてきて何をどうしたら良いのかわからなくなつてくる。

「言えなかつた・・・」とつぶやく。

ずっと俯き加減だった笠山がふと顔を上げる。

しかしそこにこつもの元氣は無く、あの時の悲しい眼をしていた。

心を見透かされるような純粋で潤んだ瞳。

その瞳にはまた涙がたまっているように見えた。

「おまやは顔を背けたり、眼をわざと逸らしたりして」めん。
でも・。
・・

「でも・・?」

大きく深呼吸をしてから腹をくくへる。

今までに味わった事の無い緊張感。

そして今までに無いくらいの重く、暗い空気が流れる。

「俺は、 笹山の事が好きで好きでたまらなくて。 でも顔や目を合わ

「 笹山の事が嫌いで顔を背けたりするわけじゃないんだ。」

「えつ・・・?」

せる事が物凄く恥ずかしくて・・・。こんな経験始めてだつたから
どうしたらいいのかわからなかつたんだ。」

「.....」

相当驚いたようだ。

あの時と同じように笠山の瞳から次々に涙があふれ出でくる。

これが俺の正直な気持ち。

よつやく言ひ事が出来た。

「誰よりも笠山の事が好きだ。

俺と・・・付き合って下さい。」

今まで何なのかわからなくてもやめしていた気持ち。

笠山の田を見つめる。

背けたり逸らしたりなんてせず。

口を手で抑えて涙を流し続けていた。

笠山は震える口を必死に動かしながらゆっくりと答えを出す。

「私も・・・私も先輩の事がずっと大好きでした・・・でも、本当になんかでいいんですか・・・？」

そう俺に問いかけるとそのまま号泣してしまつ。

俺は少し俯き、慎重に言葉を選んで口に出す。

「・・・笹山だからいいんだよ。俺は笹山がいいんだ。代わりなんていない。」

この言葉を発した瞬間、笠山は力が抜けたようにその場に座り込んでしまった。

「本当に・・・本当にあつがといわれこます・・・よ、よひじくお願ひします・・・」

ヒカルは咳やすすり泣きが入りつつも一響で答えてくれた。

「――、いらっしゃりようじくお願いします。ありがとうございます・・・」

頭の中が混乱して今の状況をうまく掴めない。

(これまでのなか……？ とりあえず慰めてあげないと……)

そう想い、俺は手を差し伸べる。

「ずっと辛い思いさせて、ごめんな。さ、立ち上がるか？」

「ぐすり・・・すみません・・・」

俺の手をじつかりと握って立ち上がる。

「ほら、これ使っていいから。もう泣くなつて。」

微笑みながらポケットからハンカチを取り出しそれを手渡した。

優しくしたつもりだったのだが、笹山は余計に泣き出してしまった。

そしてハンカチを受け取ったほんの一瞬の出来事だった。

俺はバランスを崩し、倒れそうになる。

（氣づくと、笹山が俺の胸でわんわんと泣いているではないか。）

「」の状況に迷ったからここのかわからずあたふたするばかり。

でも、そんな笛山の事をとてもことおしゃべりた。

俺は笛山の事を軽く抱きしめながら

「本当に・・・」めんな・・・

そう語っていた。

笛山は思っていた以上に小むかせわほわした感じで例えるならば羽毛布団のようだった。

もしかしたら例える事など出来ないかもしねない。

そんな不思議な感覚だ。

じょりく泣いていたがようやく泣き止んでくれた。

「じゃあ、そろそろ帰るか?」

「はい・・・服、グチャグチャにしちゃつて」めんなさい。

「気にしないでいいんだよ。後、敬語も使わなくていいよ。

「うん、わかった・・・」

照れくしゃみついでに笛山も照れくしゃみつい。

「じゃ、帰る? 番識。」

「うん。」

ようやく元気な笑顔を取り戻してくれた。

互いに微笑みあつと手を握り締め、帰路に着く事にした。

第十一話・結局（後書き）

とつとつと結局こじつけました（笑）

次はある矛盾を解決したいと思います。

第十一話：一人きりの帰り道

隣に笠山がいて手を繋いで一緒に帰っている。

しかも一人きりで。

まるで夢みたいな状況。

先ほどよりだいぶ頭が直ってきてようやく歓喜の喜びをかみ締める。

(やった！　OKしてくれたんだ！)

心の中でガツッポーズを100回くらいしただけ。

顔は真っ赤っかで沸騰したヤカンみたい。
心臓は破裂寸前。

繋いだ右手から温もりが伝わってくる。
細くてちよつと冷たいちっちゃな手。

遊園地以上に緊張して歩く時に手と足が一緒に出てしまった。そつだ。
・・・そんな事を考えていると本当にそうだった。

「あ、手と足一緒に出てる！　面白いー！」
思いつき笑われてしまった。

最近、かつて悪いところばかり見られてしまっている。

(・・やつぱり泣いてるより笑ってる方が絶対可愛いよなあ。)

思わず笠山の顔をじーっと見つめてしまつ。

今なら翼の気持ちがよくわかる。

するとそれに気がついた笠山が顔を赤らめて言つ。

「せ、先輩！ も、そんなにじつと見つめられると恥ずかしいよ・・・」

「「めん」「めん。でも田、見て欲しいんだろ？」

「そ、そうだけど・・・」

「じゃあいいじゃん！ なつ？」

「い、今はそんなにじつと見つめる時じゃないですか！ また何
か考えてたの？」

少しからかつてみた。

必死に反論してくる。

まだ先輩のなごりが消えなくて時々敬語になるのも面白い。

(俺だつてじつと見つめるの、かなり恥ずかしいけどな・・・)

「・・・ち、笠山やつぱり可憐になつて。」

調子に乗つてつい言つてしまつ。

まあ、ふざけて言えるほど人間が出来てないから俺も顔真っ赤だけ
ど。

「！ 先輩！ い、いきなり・・・」

あたふたして慌てて顔を隠す。

「「」「ごめん・・・」

一人してりん「病にでもかかつたみたいに顔が赤い。

慌てて顔を赤らめる姿も可愛い。

(まことに、おまかせください。)

けどそんな事言つたつて可愛いもんは可愛いのだから仕方が無いが。

「・・・た。

۱۷

うまく聞き取れなかつたので聞き返すが思わず間抜けな声が出てしまつ。

「でも先輩に言つてもられて嬉しかつた。」

—
•
•
•
—

(本當にやほい！)」まま死にをう！――

お互いに真っ赤にした顔を下に向けながら少しずつと歩く。
無言のまま。

少しの間、沈黙が続いたがさすがにダメだと思ったので俺が話題を持ちかける。

「あのね、翼にプロフのJRL教えてもらつたんだ。」

「えつ？」

「そ、そこに好きな人の事が書いてあって……」

聞いちやいけない、と歯止めをかけようとしたが遅かった。

「あ、あれは……。」

何かを言いかけて口を噤む。

「あれは？」

歯止めがきかない。

「・・・クラスの子に『齊藤先輩の事、好きでしょ?』ってしつこく聞かれ続けて思わず適当に書いたんです・・・」

この事でかなり凹んでいた俺はなんだつたのだね。あれだけ泣いてしまったのがアホらしく感じる。

「そつか、あれ結構・・・で、でも――」

大きな声で遮られてしまった。

「本当は入部した時くらいからずっと先輩の事が好きで・・・だから先輩が告白してくれたのもすげく嬉しくて・・・」

まさか・・・。

まさか篠山の口からこんなことが聞けるとは思わなかつた。

全然そんな素振り見せなかつたのに・・・。

「あ、ありがと・・・」

「じゃあ、家ここだから・・・送つてくれてありがとうございます。」

話しているうちに釜山の家に着いたようだ。
まだ敬語が抜け切らない。

当たり前か。

「あ、そつか。じゃあまた明日な!」

俺は大きく手を振ると自分の家へと帰った。

(あと姉貴と翼にも言わないとな)

「ただいま！姉ちゃん？！」

ドタバタと家を駆け回り姉貴を探す。

「何？もう少し静かにしなさいよ。で、どうしたの？大会で勝つた？」

寝ていたようで畳を軽く擦りながら言った。

「ごめん。勝つたよ、後・・・」

「後？」

「・・・笛山に告つて〇〇Kしてもらつた。」

姉貴は眠氣覚ましに「コーレーを飲んでいたが思わずむせてしまつ。

「「ホツッ！ う、嘘・・・よかつたじやんーー。」

「うん、告つたらこきなり抱きつかれて大泣きしちゃつて・・・。」

また姉貴むせてしまこ、わつきよりもひびくなる。

「「ホホホホホホホツッ！ あ、あんた・・・。」

とつあえず早めに夕食と風呂を済ますと遊園地の事から先ほどのことまでを淡々と説明していく。

「つゆ、竜・・・。 あんた、凄すきるよ。」

「やうなの？」

いまいち寒感が湧かない。

確かに告白して〇〇してもらつた事はよかつたけどそんなにすこい事なのか？！

「だつて遊園地のシチュエーションといい告白のシチュエーションといい・・完璧じやない！ 私もそんな恋をしてみたいなあ。」

(よくよく考えたら好きな子が自分の事を前々から好きだった、な

んてあんまり無いよな。）

またしても心の中でガツツポーズをしまくる。

「顔、近づけやがったって。む、もひつけは早く寝なれ。疲れてるんだじ。」

「わかったよ、じゅおやすみ。」

自分の部屋へ行き、寝ることにした。

第十一話：一人きりの帰り道（後書き）

ちょっとアイデアが不足してきます（汗
今後の展開がどうなるかまだわかりません。

温かく見守ってくれると嬉しいです（汗

第十二話・数日後・・・。

そして、一週間が経つた。

比較的こつもと回じよひな毎日。

ただ、今までと違つ少し進歩したこともあった。
よつやく顔を見て話せるようになつてきたんだ。

今までには本当に真下を見てて。

笹山のスニーカーを見つめながら話してた。

今思つとかじく変な格好だ。

それが唇のあたりを見れるようになつてきたのだ。

自分の中では大きな一步。

・・やんと田を見て!つてもう一度注意されたこともあったけど
・。

(田はホント無理だつて・・・)

どんなに頑張つても鼻の付け根のあたりまで。

たまに意地悪でこきなり顔を低くされ無理やり視線を合わせさせら

れると本当に慌てる。

「もひー！ そろそろ慣れてよー！」

と膨れつ面で言われるのが最近の日課。

それを翼と筒井にからかわれるのも最近の日課。

笹山はだいぶ慣れてきたのか田をきちんと会わせたりしてくる。まだ顔は赤くなったりしてはこるが。

俺がきちんと田を見て話せるのはこいつになることやう・・・。

（告白した時はきちんと田を見て話せただけどなあ・・・）
といつも心の中で嘆くが何も変わらない。

ちなみに翼と筒井に俺たちが付き合い始めた事をきちんと報告した。本当はその事だけを簡潔に話すつもりだったが告白の仕方やその他諸々も話す羽目になってしまったけど。

話した時は本当に大変だった。

部室で翼と筒井だけ呼んで話したのに話した途端、急にお祭り騒ぎ。なんと部員全員、影に隠れて俺たちの報告を盗み聞きしていたのだ。驚いた事に笹山が俺の事を好き、といつ事は一年全員知つていて。俺が笹山の事を好き、という事は一年全員が知つていた。

まあ、犯人はあの半分バカップルになりかけている一人しかいないと察したが。

そんなわけでいつも俺たちがくつつけたら面白いの、と話していらっしゃい。

そして大会の日、俺が 笹山を呼び出した事で告白して付き合い始めたと確信したそうだ。

誰にも見られないように呼んだはずだったのだけど……。

それにこれで俺がフ separate; たらどうするつもりだったのだらうか。

翼は俺の性格上、付き合つ事になつたら報告してくると先読みしていく。

それを部員に伝えて一人でこのことを報告してたらみんなで祝おう、というサプライズをしようという事になつたようだ。

見事に俺は翼の策略にはまってしまった。

筒井も筒井でやる気満々だつたらしく、顧問のいない日をわざわざ調べたりお菓子や飲み物の買出し長のような役目を果たしたと言つていた。

そこままでして・・・と少し呆れてしまつたのは黙つていた。

最初は俺も 笹山も少し不機嫌にみんなの祝福をうけていたが、次第に楽しんでいった。

確かに冷やかしつづけたかつたけどたまにはドンチャン騒ぎをするのもいい。

それに一応、大会の祝勝会っぽい雰囲気もあつたし。

(どうせだつたら祝勝会をメインにしてくれれば良いものを・・・。)

ぶつくさと文句を言つてこいたら軽く注意されてしまった。

「先輩、いひなつたり楽しみましょひよ? ね?」

優しく諭されて少し顔を赤らめっこると全員から冷やかしを入れられた。

これはもう一種のいじめにはならないのだろうか?

「ああもひーー オ前たち明日300本やらせねーーー。」

手を振り払うように笑いながら大きな声を出す。

するとあちりーひかりから、「それはナイっすよ~」「無理!」などと聞こえてくる。

極めつけが「彼女さんからもなんとか言つて下せよ~?」だと。

(からかうのもいに加減にしようよ・・・。)

うな垂れているとみんなから爆笑の渦が巻き起こった。

とにかく飲んで食つて騒ぎまくつた。

部室が汚すぎるとまづいので適当に掃除をしてからファミレスに移動したりした。

かなり迷惑な客だったであらう。

一応店員の人には出る時に「うるせーとすみませんでした」と言つておいた。

そんな感じでその日はずっとみんなで遊んでいた。

まったく、良い仲間なのかおかしい面子なのかわからない。

これで地区大会は終わり。

県大会は後、一ヶ月後。

——田中は俺の400mと翼の100m。

——田中は笠山と筒井の200m。

後、リレーでも県に行つた。

自分の種田の事で頭が一杯でリレーは走った事すら忘れていた。

後々思い出したのでかなり自己嫌悪が激しかった。

一ヶ月でどれだけ成長できるのか。

そこにかかっているんだ。

出来るかな？ じゃなくて。

出来る、やしないなればいけないんだ。

第十二話・数日後・・・（後書き）

飛んでしまつてすみません^ ^ ;

最近どうじても都合が合わなくて（汗

ここからは県大会モードに入つてこきます。

「決意」のあとがきでは終盤、と書いたのですがもう少し続けたい
と思います（笑）

第十四話・夢から現実へ

「目指すは全国大会だな。」

気づくと田の前に翼が立つていて真面目な顔で言い放つ。

「全国大会に行くためには『標準記録』を突破しなきやね。」

笹山がいつもの笑顔で微笑む。

男子100mの標準記録は11秒30。
現在、翼の持ちタイムは11秒62。

たつた0・32秒。
されど0・32秒。

この微妙な数字を伸ばすには途轍もない努力がいる。
記録だつてずっと右肩上がりなはずがない。

特に100mの場合、ほとんどが己の才能の世界。

女子200mの標準記録は26秒24。

今、笹山の持ちタイムが26秒44。
筒井の持ちタイムが26秒72。

二人は今行けなくても来年がある。
もちろん今年行けるのに越した事は無いが。

俺の400mの標準記録は52秒14。
この間出した自己ベストは52秒38。

「みんな・・・全国に手が届くレベルなんだね・・・」

神妙な面持ちで筒井が言つ。

「そうだ・・もう夢じゃないんだ。
絶対に、絶対にみんなで全国に行くんだ。」

俺はそう決めた。

その途端、なぜだか頭に痛みが走る。

ハツと気がつくとそこは教室の自分の席。

クラスのみんながグラグラ笑っている。

前の席の翼も机に突っ伏していたが叩かれた。

頭の痛みの正体は英語の先生が振り下ろした教科書の角。どうやら旦頃の疲れで授業中にも関わらず俺と翼は爆睡していたらしい。

一日の最後の授業で眠くならない人などいるのだろうか？

（今のは夢か・・・）

叩かれた頭を押さえて目をこする。

「斎藤、片桐ー。俺の授業で居眠りとは良い度胸だなー・・・罰として問題！」

俺も翼も一人で顔を見合させていた。

「Which is faster. Tsubasa or Ryuu?」

「早く言えた方は今の居眠りはチャラだから。」

「ヤニヤと笑いながら俺らに叫んだ。

「I think Tsubasa is faster than Ryuji.」

翼に先を越された。

しかも日本語に直すと俺より翼の方が速いって事になるし。
(いつも時は普通相手を上に持つてくるでしょうー)

心の中でツッコミを入れた。

「お見事！ 片桐はチャラ。斎藤はそのまま減点！」

「そ、そんな…・・・ひどいっすよー。」

またクラスに爆笑の渦が巻き起こる。

教科書で叩かれるわ笑いものになるわ減点されるわ・・・。

まさに踏んだり蹴つたりだ。

気分がどんよりとしたまま授業は終わった。

(英語は嫌いだし翼より早く答えるなんて無理だつて……)

噂をすれば、本人が寄ってきた。

「悪い悪い！ 思いついたのがあれだったからさ…」

「お前よー・・・普通相手を上にして言うでしちゃうが。」

俺は恨めしそうな目で翼を見る。

「そんなに怒るなつて！ そつそつ、今日四人で帰らないか？」
「え？」

「綾香にはもう言つてあるからさ、多分笠山も知つてると想つ。」

「あ、香織が良いならいいけど・・・」

まだ本人を目の前にして名前呼びは辛いが、本人がいない時は名前で呼ぶようになった。

「じゃ、決まり！ 校門の前で待ち合わせな！」

翼はそつそつと教室を出て先に外へと向かう。

しばらく俺はポカーンとしていたが慌てて鞄を手に取った。

「お、おこー、ちょっと待てよー。」

そう言って俺も校門へと急いだ。

第十四話・夢から現実へ（後書き）

なんか、この小説つて帰り道多いですね（笑）
書きやすいんでそうなつてしまふのですが＾＾；
標準記録は新潟県のものを使わせて頂きました。

ちなみに標準記録を突破しないとたとえ一位であっても全国大会には行けないのです。

第十五話・仲良し四人組

夕日で赤く染まる校庭。

みんな足早にそれぞれの家へと帰つていく。

俺と翼はそんな夕方の様子をぼーっと見つめて一人を待つていた。

「・・・来ないなあ。」

俺がそうつぶやく。

「そうだな、そろそろ来てもいいと思つけど・・・

一人で目を凝らして昇降口のあたりを探した。

「いた！」

俺が指差して叫ぶ。

好きな人を待つてゐる時はどうしてこんなにも長く感じるのだらうか。

「遅れてごめん！ 先生の話、長くって・・・

筒井が両手を合わせて謝つてくる。

香織も息を切りして謝つてきた。

「「あー… ちぐに行きたかったんだだけ…」

深く追求せずに許してあげた。

あ、ちなみ。

笛三の「」、呼びで呼ぶようになったんだ。

・・・と二つか三つ言われた。

俺が二つものように「なあ、笛三?」と呼んだ時だった。

香織は振り向くとなぜかしょぼんとしていた。

「どうした? 真面目でも悪いのか?」「うん、先輩。…これからが本題で呼ばない…?」

「えつ・・・？」

「あつ、べ、別に嫌ならそれでいいんだけど・・・。」

名前で呼ぶ、なんて考えた事が無かつた。
翼たちはいつもキャラッキャラと名前で呼び合っているが、自分もあるのか？

「い、嫌じやないけど。」

「じゃ、じゃあ。名前で呼ぼう？・・・竜一。」

「わかった。・・・香織。」

この日、俺たちは手をギュウッと繋いだまま何も話せずに帰った。

この瞬間は今までドキドキした中でもトップ5に入るくらいドキドキした。

一位はダントンで告白した瞬間。

一位は観覧車の中で一人きりで隣になつたとき。

三位はお化け屋敷でいきなり手をつながれた瞬間。

四位は・・・色々ありすぎてわからない。

まあ、とにかく。

それくらいの衝撃だったといつ事だ。

そんな風に考え方をしていくとこの2つの中間にか公園にいた。

「竜」—。お前なんですか」とボーッとしてるんだよ。」

翼に怒られてようやく気がついた。

学校から少し離れた広い運動公園の中の休憩スペースのような場所。

128

「あ、ごめん・・ちょっと考え方してた。」

「部長」—。こんな時に考え方してちやダメですよー。」

筒井の甲高い声が耳に突き刺さる。

「悪い悪い！ 県大とか色々、な。」

「変な事でも想像してたんじゃないの〜？」

翼が目を細めてニヤニヤと言つ。

「ば、馬鹿！ んなわけないだろー。」

「はいはい！ 下ネタ禁止！－！ 先輩も考えるなら家でー。」

「うて、お前もかよー。」

俺たちのやりとりを見て香織はクスクスと笑っている。

「それは置いておいて・・・竜一、前に渡した笹山のプロフ、見たか？」

「はつ？！」

「いやいや、だから笹山のプロフ。」

「・・・」

「大丈夫だつて！ ちゃんと本人に了解を得て竜一に渡したんだから。」

「・・・見た。」

いきなりこいつは何を話すのかと思った。

「あの時に俺、笹山の事可愛いつて言つたよな？ どう思つた？？」「どう思つたって・・・」

「こいつ、本当に馬鹿か？
本人がいる前で言えと？」

筒井も知っていたようで興味津々に見つめてくる。

香織も知りたいような知りたくないような、と言いたげな顔をしていた。

プロフの事は香織にも話したけど・・・。

「いいからいいから！ 早く！」

翼が急かす。

「・・・メッチャ凹んだ。」

「なんで？？」

すかさず翼が追求してくる。

「あの時、翼にはムカつくようななんとなく悲しいようなそんな感情が芽生えた。・・・プロフ見たとき、同学年に好きな人いるって書いてあつたから凹んだ。」

翼と筒井が顔をあわせてニヤッと笑った。

「あのな、あれ。俺と綾香が竜一はどう思つかなーって試したわけ！」

「・・・・はあああ？ーー！」

「俺が笹山の事を可愛いって言えば、竜一も嫉妬するかなーって。」

「まったくこつらは・・・。

とこつかそのころから付き合っていたのかよ。
全然気がつかなかつた。

「いや、あれは嫉妬じやなくて・・・」

「こつらの手の上で踊りをされていた事を認めたくなくて必死に反論する。」

「いやいや、そんな感情の事を『嫉妬』って言つ。」

「先輩、香織が他の一年の男子と仲良さそうに話してるとなんか変な気持ちになりますん?」

「・・・。」

「わつこえは一年の男子で香織の事が好きつてこつらが・・・」「ちよ、ちよつと! 紗香! -!」

香織が困つたよつて一生懸命遮ろうとする。

(俺の他に香織の事が好きな奴が・・・?)

胸の奥から湧いてくるこの気持ち。

なぜかその誰だかわからない男子にムカついた。

「竜一、今その一年にムカついただろ。それが嫉妬。わかった？」

嫉妬、か。

「でも、香織よかつたね！ それだけ好かれてるって事じやん！」
「・・・うん。」

香織は少し俯きながら微笑んだ。

その照れながら微笑む姿にしばし見とれていた。
もう翼のようになつているのかもしれないな。

「じゃ、遅いしそろそろ帰る？」
そう、筒井が言った。

そしてこつものように家へと帰った。

夜。

俺はベッドに寝つけるがつて漫画を読んでいた。

静かな俺の部屋に携帯の着信が鳴る。

メールだ。

「今日は楽しかったね！ それに・・なんか嬉しかった 私も竜二が他の子と話してたら嫉妬しちゃうかも・・。ちなみに私は竜二一筋だから安心してね！（笑） 県大までもう少しだけど怪我しないように頑張ろ！」

素直に嬉しかつた。

意識しなくても頬が緩む。

ずっと不安だった先ほどの事が一気に消え失せる。

早めにメールに返事をした。

その後、自然に手が動き「保護」の所にカーソルを合わせボタンを押していた。

(本当に香織といきあわせてよかったです・・・)

改めてやひのゆうであつた。

第十五話・仲良し四人組（後書き）

更新遅れて、ゴメンなさい。（汗

なるべく水曜日・土曜日に更新できるように頑張ります^ ^；

ちなみに最初のこの翼の「可愛い」は一応伏線つて事で（笑）

第十六話・新たな課題

県大会まであと2週間に迫ったある日。

「コラッ！ 三月！ 日高！ テキパキ動け！」

「はい！ すみませんっ！！」

バトンパスの練習中である。

今、怒られてるのは三月廉太郎。
みつきれんたろう

それと日高怜。

二人ともリレーメンバーだ。

一年なのに一年を差し置いてリレーメンバーに選ばれるほどの逸材。

リレーメンバーは四人。

400mリレーだから一人100m。

一走は三月。

こいつはスタートダッシュが部内で一番速い。
俺や翼でもスタートではこいつに勝てない。

いわゆる「天性の才能」らしい。

それを生かして100mをやっている。

完璧な前半型の走り。

まったく羨ましいものだ。

一走は翼。

先生曰く一走は大抵どの学校もエースが走るらしい。
ここでも翼の方がエース扱いのが少し癪だけ。
タイム的にはあまり大差ないのに・・。

まあ、コーナー走がそんなにうまくないってのもあつたらしいけど。

三走は俺。

俺は翼とは正反対でコーナー走の方が得意だ。

昔、俺も100mをやってたが三月みたいな爆発的な瞬発力は無かつた。

その上走り終わつた後に少し余裕が出来てしまつ、そんな中途半端な走りだつた。

そこを先生に指摘されて400mに転向したつけ。

アンカーは田高。

こいつに加速走をやらせたら俺も翼も追いつけない。
部内で多分、加速が一番うまい。

専門の200mでもスタートして50m付近からかなり加速する。
典型的な後半型だ。

この4人の面子で県に挑む。

ちなみに今は二月と翼が合わせている最中だ。

「よーい・・・はー!」

スタートの一 年が合図をして二月が走る。
二つのスタートを見ると呆気にとられる。

あつといつ間に翼がつけたポイントの所まで走ってきた。

翼が走り始める。

「はーい!..」

掛け声とともに翼が手を出し、バトンが手に渡る。
そのまま翼が駆け抜ける。

「翼! タイミングはバツチリだけど手、もつひょこの方が安定
すると思づ。」
「ああ、わかった。三月、悪いな。」
「いえいえ! 全然大丈夫ですよ! じや、部長と冷も・・・」
「そうだな。竜!」俺らは一度見てるよ。み。」
そう言つと翼は俺にバトンを手渡す。

スタート地点に行くとスタートの指示が出る。
「位置について。よーい・・・はー!」

バツと飛び出す。

学校の校庭は一周200mなのでカーブがキツい。

かなり体を傾けて走らなければならぬ。

が、俺はとりあえず難なくこなす事が出来た。

そして日高がつけたポイントへと足を踏み入れる。

田の前の日高が走りだした。

日高の背中を追いかける。

(もう少し、もう少し・・今だ!)

「はいっー」

日高が手を伸ばすが届かない。

(くそつー！ 早すぎた！)

結果、バトンはうまく渡らなかつた。

試合でこうなつてしまつたらテイクオーバーゾーンで失格になつてしまふ。

「竜ーー。声出すのが少し早かつたな。もう少しだけ遅らせていいくと思うな。」

「ありがと。日高、ごめん！」

両手を合わせて平謝り。

「いや、いっすよ。俺ももうちょっと合わせますんで・・・。」

こうして何度もバトンパスを繰り返した。

新たな課題が出来た。

この課題を早くクリアしなければ。

。俺はもう一度気持ちを入れなおしてスタートに立つのであった・・・。

第十六話・新たな課題（後書き）

バトンパスです。

テイクオーバーゾーンとはバトンゾーン（バトンをこの中で渡さなければならぬ）から出てバトンが渡った場合、失格となってしまいます。

本文、短くて申し訳ないです（汗

第十七話・波乱の予感

あれからバトン練習を日高が暮れるまでやつた。

合計で何本やつたのかわからない。

でも、ようやく先生からも〇×を貢えるバトンバスをする事が出来た。

俺と日高のところが全然うまくいかなくて大変だったけど・・・。

こういう細かい合わせは苦手で俺がミスしてばかりだった。
それなのに日高は文句一つ言わずに付き合つてくれた。

あれが他の奴だったら確実にキレているだろ?。

本当に感謝している。

あいつの性格が黙々となんでもこなす性格でよかつた。

「お疲れ様です!」
「お疲れっす。」

三月の大きな声と日高の低い声が聞こえた。

あっだけ走ったのに三月はなぜこんなにも元気なのだろうか・・・。

「お疲れさん。じゃあな。」

翼はもうクタクタのようでは適當な挨拶しかしなかった。

「お疲れ！ 田高、最後まで悪かつたな。じゃー！」

田高に謝り、俺も翼の後を追う。

みんな一生懸命取り組んでいたため、もう部活終了時刻は過ぎ既に辺りは暗くなっていた。

香織に途中で先に帰るよう言つといたほど。

あまりのんびり帰宅していくと夕飯抜きにされてしまいそうだったので翼と一緒に足早に家に帰った。

「ただいまー。飯は？」

「はいはい、出来るわよ。」

家族みんな夕食は食べ終わっていたようだ。

腹が減りすぎて死にそう。

俺はカレーを3杯平らげるとなぐりに風呎へと入った。

その早さと量にみんな驚いていた。

(まあ、山盛り3杯を25分たらずで食べたら驚くよな。)

風呂もさつあと出た。

早めに寛ぎたいのだ。

急いで自分の部屋へと向かつた。

床にあるクッショוןに座り、コンポの電源を入れた。
大音量で流すと姉貴に怒られるので音は小さめだが。

座っていたクッショൺを枕にして寝転ぶと携帯を手に取る。

「新着メッセージ2通」

液晶画面にそういう表示された。

一通目は香織から。

「バトン練習お疲れ様！ リレーメンバーはやっぱ速いね！
トン、うまくいった？ 疲れてるなら返事無くても平気だよー」 バ

ねぎらいの言葉だ。

疲れている時に好きな人からこんなメールを貰うと疲れが一気に吹き飛ぶ。

(香織からのメールなんだから疲れてたって返事するつて。)

そう、心の中で密かに思いながら文章を考える。

「ありがと！ バトンは最後はOKもらえたよ。それまでかなり時間かかつたけど・・・。全然心配しなくて大丈夫！」

何度も誤字・脱字が無いか確認して送信ボタンを押す。

一通目は筒井から。

「明日って何時集合でしたっけ？！（汗）あと、今日は香織が寂しそうにしてましたよ？（笑）」

筒井らしいメールだ。

集合時間を忘れてるとこがあいつらしい。
しかもメールでもからかってるし。

とりあえず、集合時間を書いて最後に「ばーか」と入れて送信しておいた。

しばらく漫画を読みながらくつろいでいるとまた携帯が鳴った。

だがメールでは無い。

(電話・・・?)

「もしもし?」

「あ・・・こきなりごめんね。今、大丈夫?」

電話の主は香織だった。

向こうから電話が来るのは珍しかったのでかなり驚いた。

「大丈夫だよ。ちょうど暇だつたし。」

俺も香織も某携帯会社の人気プランを使っているためこの時間帯なら無料で通話出来る。

携帯の料金は俺の場合、基本料以外は自腹なので注意しなければならない。

「よかつた! あ、メールでも言つたけどお疲れ様!」

「ううん、ちょっと疲れたらいいだから平気。」

未だにどこかぎこちない話し方になってしまつ。

なぜ翼や筒井の時のように話せないのでだろうか・・・

「そつかあ。寝なくなつたら言つてね! いつでも切るからー。」

「ああ、ありがと。でも・・。」

「ん？　どうかしたの？」

「香織と話してみたいなあーって。。。

つい、本音が出た。

こんな事を大っぴらに言つちゃつて平氣なのか？
なぜか言つてはいけなかつたような氣がしてきた。

少しの間、香織は黙り込んでしまつた。

「ありがと・・私もそうだよ・・。」

電話じしだが顔を赤くして下を向いている香織の姿が想像できる。
言つてしまつた俺自身も恥ずかしい気持ちで一杯になつた。

「あ、いや、その・・なんていうか・・。」

思わず慌ててしまつ。

お互に黙つてしまつた。

電話での沈黙は一番氣まずい。

「あ、あのね。実は・・・。」

香織が沈黙を切り裂いた。

「ちやんと聞いておかないといけない事があつて・・・。」

俺はなぜだかす」「嫌な胸騒ぎがした。

第十七話・波乱の予感（後書き）

なんとか一日連続更新できました。

これからもう少し更新出来るように努力します^_^；

第十八話・予想的中

「言わないといけない事……？」

なんだろう。

聞いちやいけないような聞いておかないと後悔しそうなそんな感じ。

「あ、でも私がそう思つだけだけど……。」

「いいよ、言って?」

大きく深呼吸をして覚悟を決めた。

「あ、あのね、今日……。」

「今日どうかしたのか?」

あまり追求したくなかったがつい突き詰めてしまつ。

告白？ 誰に？

頭が真っ白になつていぐ。

香織を取られてしまつよつたそんな不安に襲われた。

「誰に？」

一つ一つ整理しながら聞いていく。

香織は一呼吸置くとゆっくつと話す。

「・・三月頃。」

三月？

あの三月か？

そんな素振りはまつたく見せなかつた。

さらにも思い出してみるといつもより明るかつた氣もある。

「え、けど三月は俺たちどずっとバトン練習してたよな？」

「いつ？」

俺の少ない知識の中では告白、といつもの放課後とか何かの行事が終わった後だと思っていた。

「今日の部活が始まる前に呼び出されねー・・・ナレで・・・。」

あまつ香織を追って詰めるような事はしたくない。

けび、けび・・・。

「で、でもちやんと断つたよ・・・？ 私、付き合ってる人がいま
すって。せりふんどしめんなさい、つて・・・。」

二円の印象は軽そう、俗に書い「チャラ男」タイプだった。
あんな奴に香織を渡したくない。
三円に対して理不尽な怒りがこみ上げてくる。

「・・・。」

俺は黙つたままだった。

何も言う事が出来なかつた。

携帯を持つ手が震えてくる。

それが怒りに打ち震えていたのか悲しがりみ上げてきたのかはわからなかつたが。

「やう言われてどう思つた？」

怒りにまかせてつい、意地悪な質問をしてしまつ。

「気持ちは嬉しいけど、やつぱりダメだつて・・・」

「・・・嬉しかったのか・・・」

後々考えれば「ぐぐく普通の受け答えなのだが、この時点では俺の思考はおかしくなつていた。

そして、俺は一番危ないボタンを押そうとしていた。

「お前、三月のこと・・・「お願いーー。」

言いかけたところで大きな声に遮られる。

「三円君の事はなんとも思ってないから・・・私が好きなのは竜一
だから・・・お願いだから私の事、嫌いにならないで・・・？」

携帯を通して聞こえてくる声が徐々に涙声になつていった。

香織の涙ぐむ声とこの言葉を聞いてようやく怒りが収まる。
寧ろ、香織の事を信じていなかつた自分に腹が立つ。
それと同時に香織に対しても申し訳ない気持ちで一杯になつた。

「「めんな。俺、それ聞いた時にとっさに香織が三円の事を好きになつちやうかも、つて思つちやつて・・・。香織の事、本当に信じきれてなかつた。信じてたらこんな事思わないもんな・・。本当に、本当に」「めんな・・・。」

精一杯の謝罪の念を込めて謝つた。

本当に悪い事をしてしまった。

なぜ俺はいつも自分で自分の首を絞めるような事ばかりしてしまつ
のだろうか・・。

「ありがとう・・・わ、私の言い方が悪かったの・・・。」

「いや、俺が勝手に思い込んでやつて・・だから香織は何も悪くな
いよ。俺も香織の事が好きだから・・本当にごめん。」

香織がすすり泣くのが電話で伝わる。

「泣かしちゃつて本当に懲かった。でももう泣くなつて。ほら、な
？」

「だつて・・・だつて・・・竜一のばか・・・。」

俺はまたしてもあたふたするばかりであった。
なんとかして機嫌を直してもらわないと・・。

(やうだ!)

「香織？　ちょっとベランダ出てみ？」
「ぐすつ。何・・？」

俺もガタガタとベランダへと出る。

「ほらっ。上見て？ 星、綺麗だよ。」

空にはいつもよりも多く星が光っている気がした。

「わあ・・・綺麗だね・・・。」

「あの一番明るく見えるのがシリウスとプロキオン。で、三つ並んでるのがオリオン座。見える？」

「あつた！ 綺麗～・・・。」

さつきまでの涙ぐんだ声は消え、楽しそうな声が聞こえてきた。
(よかつた・・機嫌、直つたみたいだな。)

「あ、寒いからあつたかくしろよ？ 風邪とか引くなよ。」

「むづ〜。ひつちやい子じゃないんだから〜。ふふつ。」

俺、そういうえば薄着のまま戻しかねやつた。
結構冷えるな。

「さ、そろそろ中に入るか。風邪引くやつ？」
「だからちつちつ子扱いしないのー。」

(気遣このつもつだつたけびつとおじつかつたかな。)

「香織・・・?」

「ん?」

「俺、これからちゃんと香織の事言じる。隠し事もしない。約束する。」

「…うん… 約束だよー。」

そう固く誓って呑つた。

「じゃあ、眠いから寝てもいい?」

「あ、『めぐねー』おやすみー。」

「おやすみー」

電話を切る。

通話時間、3時間。

こんなに長電話したのは初めてだ。

「うして波乱の幕は閉じた。」

もつと・・・香織の事を信じないと・・・。

出来てこないよひで出来ていない、そんな事を思い知らされたのであ
つた。

第十八話・予想的中（後書き）

最近、すこべタなセリフになつてゐる気がします（汗
もしも類似表現などありましたら大変申し訳ありません。
言つて下さればすぐに修正致しますので。。。

第十九話・待つてましたよ春スキー。

暖かな日差しが燦燦と照りつける。

この時期なのになんでこんなに暑いんだ。

4月になつたばかりだといふのに。

俺たちの県は少し変わつていて他と時期が違つ。なぜか4月の終盤あたりに県大会がある。

もちろん全国の日にちは他の県と同じ。未だにこのシステムは理解できない。

第一、陸上の試合期は大体4～10月あたり。

普通なら今の時期には市大会があつて7月くらいに県大会があつて、つていう流れなのに。

お偉いさんが頑固な人らしくてここだけは譲れないそうだ。毎度毎度よくわからないポリシーを持つ人だと思つ。

県大会まではあと約一週間。

このままの調子で行けば、ベストで行けるだろ？。
俺は昔から本番には強い方だった。

といつかあれほど緊張感が無いと持てるすべての力を出し切る事が出来ない。
自分では真面目に走っているつもりでも手を抜いていくように見える時があるらしい。

まったく困った部長である。

まあ、とりあえずそれはおいといて・・・。
明日から二日間、学校全体で行事がある。

みんなで春スキーをするそうだ。

三年生はもう卒業しちゃったから一年だけで。

冬のシーズン中に行かないのには訳がある。
まずは混んでるから。

だからあえてシーズンが終わってから人工雪の所でやるらしい。

もう一つは昔は普通に冬にやつていて。

その時に急に吹雪ってきて、一人雪山に取り残されて。
結局そいつは行方不明のまま発見されず・・・。

警察とかがかなり動いて大事になつたらしくホテルの人やスキー場に迷惑をかけてしまった。

そのおかげで毎年使つていたそのホテルやスキー場からもお断りされてしまうから。

という噂がある。

あくまでも噂だけどやけにリアルな噂。

この事件があつてから吹雪く可能性が少ない春スキーに変更した、と聞けば辻褄も合っている。

よくよく考えればそんなに大きな事件があつたのならスキーなど中止になると思うけど。

まあ、色々と曰くつきの春スキーだけど結構楽しい。

学校全体の行事だから去年も行つたがまったく滑れなかつたのにだいぶ滑れるようになつた。

斜面が急なところもかなり怖かったけど、コツを掴めば平氣だった。

数日間で自分が上達している、という実感が得られるため生徒には人気だ。

今日は翼と一緒にスキーの時のお菓子の買出しだ。

たまには男一人で行かないか？　といった事になつていつた。

お菓子を持つていぐのは一応規則違反ではない。

バスの中で退屈だ、という意見を実行委員が取り入れ「お菓子タイム」というものを作つたそつだ。

「竜一。これどうかな？」

翼が棚から持つてきたのは最近はやつているステイック状のガム。

「うーん、買つとけば？」

「わかつた。あと、みんなで食べるからポテチは欠かせないしー・。

・。
」

一生懸命にお菓子選びをしてくる翼をよそに俺はブリーフと商品を眺めていた。

正直に言つとあまり俺はお菓子を食べない方。
甘いのも苦手。

チョコレートとかホント無理。

みんなから驚かれることだ。

糖分が足りないから頭も働かないんだろうけど。

某漫画に出てくるメチャクチャ頭の良い探偵も甘い物をたくさん摑つていた。

バレンタインもチョコでは無く他のものを貰う事が多く、
チョコを貰うよりもそっちの方が嬉しかったけど。

といつわけで俺はあまり乗り気ではない。

「翼、まだか？」適当に決めちゃえよ。」

「お前・・・せつかくのスキーだぞ？ 楽しもつぜ。」

別にお菓子タイムだけで楽しむのではなくこと頃。

第一にこの行事のメインは「スキー」だ。
スキーを楽しめば問題ないと思つただが・・・。

「俺はスキーを楽しむからいいの。や、そろそろ行こう。」

「ちょ、おこ！ 待てー！」

俺が早めに持っていたカゴをレジへと持っていくと慌てて追いかけ
てきた。

「竜！ せつかちすきるひ。もう少し落ち着けよ。」

いつも俺は落ち着いているつもりだけど。
返す言葉もなかつたのでほつといた。

わざわざと会計を済ますと店の外へと出た。

「明日起きられないかも・・・。」
俺がふと呟く。

明日の集合時刻は5：00だ。
早すぎる。

「遅れたら置いていかれるな。」

翼に軽く鼻で笑われた。

「うるせえなー。遅れないよ！」と頑張るから平氣だつて。」

適当にあしりつけておいた。

「じゃあ、遅刻するなよ？」

「わかってるって。」

「じゃあな～。」

俺たちがまだつまつて家に帰る。

「のスキーでどうなるのかも知りません。・・・。

第十九話・待つてましたよ春スキー。（後書き）

県大会編に突入と書きましたがこの行事の事がすっかり抜けていました（汗）
それと更新遅れてスマミヤセン。

春スキーはどうなつてしまふのぢょうか・・?

第一十話・出発当日

次の日の朝。

まだ完全に夜は明けていない。

少し薄暗い中、重そうにボストンバックを肩に背負い学校へと向かう。

なんとか寝坊せずに起きる事が出来た。

携帯のアラームをMAXにして起きたら姉貴に怒られた。

既に学校の敷地内にバスは停まっていた。

キヨロキヨロと辺りを見回す。

(いた。あれだ。)

翼たちを見つけ声をかける。

「 よう。」

「 あ、竜！ 」。うつす。「

翼も眠たそりだ。

「 竜！」おはよー。」

筒井の後ろから香織がひょいと顔を出した。

「 慣れ」とこつものは恐ろしいものだ。

「 」の一人の前でなら面前で呼び合ひても平気。

「 先輩、おはよー。」
筒井も眠たそり。

ちなみにこれだけ面識があつて敬語、とこつのも堅苦しこのでタメ口で話すように言った。

そしたら喜んでタメ口で話すよくなつた。

「 バスに荷物を入れるへ。出発するぞー。」

担任の掛け声が聞こえた。

そういえばいれるのを忘れてた。

よくよく見たら三人とも荷物を持っていないではないか。

「あらり・・・じゃ、私たちのバスあっちだから！ 後でねー！」

焦つて自分達のバスに乗り、座席に荷物を降ろす。
翼も座席に着いたようだ。

「もう少し経つたらスキー場へと向かいます。基本的にはそれまで
自由ですが立ち歩かないように、窓から手や顔を出さないようにお
願いします。」

バスガイドがお馴染みの諸注意をアナウンスする。

「朝からラブでうらやましいですね～。」

そつ冷やかしてきたのは向かいの座席に座っている牧野尚也。まきのなおや

「うつせえな。黙つてろよ。」
ふざけた感じで適当に流す。

ここには所謂クラスのお調子者。
どのクラスにも一人はいる何かと騒ぐ奴。
正直に言つと五月蠅いサッカー馬鹿。
まあ、憎めないキャラだからいいんだけど。

「でもよー。あの子、やつぱり可愛いよなー。なんで竜一なんだろ
？」

前の席から身を乗り出して会話に入つてくる人物が一人。

ここには柏山修一。

何でもズバズバと言つ毒舌。

そのせいで色んな人と口論しているのを見かける。
それも熱くなつて暴言を吐くのではなく、論理的に。

ここつと口げんかをして勝つた例が無い。

口がよく回るからかバスケ部の部長も務めている。

「お前も！なんで朝からこんな話題なんだよ。・・確かに可愛いけど。」

最後の部分をボソボソと聞こえないようにつぶやいた。

が、それは見事に聞こえてしまっていた。

「本音が出ちゃいましたね～。」

栢山が皿を細めて一ヤツく。

「先輩・・・！ 笹山・・・！ ああーー！」

牧野が一人で抱き合っている真似をする。

「ちょ・・おい！ やめろよーー！」

俺が牧野を止めようとした瞬間

…

ドカッ！

牧野の顔に黒いボストンバックがめり込む。

「いってえええ！！」

ジタバタと騒ぎ通路にのた打ち回る。

「あんた邪魔！ 朝っぱらからつるさいわね。」

ボストンバックをめり込ませた犯人は新藤瑞穂しんとうみづほだった。

「新藤ナイスツッコミー・サンキュー！」

俺は牧野の姿に爆笑しつつお礼を言つ。

実はこの二人、幼馴染。

クラスでは牧野が馬鹿な事をやつて新藤がバシッと一発かます、といふのは日常茶飯事。

「じゃあ、そろそろ出発するから席に着け。」

担任がそつ指示するとみんな渋々自分の席へと戻る。

「ではこれよりスキー場へと出発いたします。」

バスガイドが再度アナウンスをするとバスは動き出した。

第一十話・出発当日（後書き）

少し登場人物が「ゴチャゴチャしてきたので、次は少し整理して書きたいと思います。

特別篇・登場人物紹介（前書き）

先に今までの話を読んでから改めてここを読む事をオススメします。

特別篇・登場人物紹介

登場人物紹介

齊藤竜二：

主人公。この小説の語り手的な役目。

陸上部の部長をしていて昔から物事を断れない一年生。

400mで市大会を勝ち抜き現在、県大会に向けて練習中。

恋愛経験0。

最初は自分が笹山香織の事が好きなのかどうかすらわからなかつた。好きな人を前にすると俯いてしまい顔をろくにあわせる事が出来なくなってしまう。

その笹山に告白する事が出来て現在交際中。

片桐翼：

翼の親友で陸上部の副部長の一年生。

100mで市大会を勝ち抜き、同じく皆と練習中。

メガネが特徴的でガリ勉に見えるが本当は結構なおちゃらけキャラ。

「」の小説の第一の主人公と言つても過言ではないかもしない。

現在、筒井綾香と交際中。

彼女ためならなんでもしてしまったうなほどに『アレアレ』。

笹山香織：

この小説のヒロイン役で陸上部の部員で一年生。
200mで市大会を勝ち抜き、同じく皆と練習中。

セミロングの髪型をきつたり結んでいたりしたニキビ
が可愛い。

明るい性格だがなんでも重く受け止めてしまいがち。
竜一と同じく好きな人の前では顔を赤らめてしまう。

最初はそのような素振りは見せなかつたが遊園地の一件があつてから竜一と急接近。

入部当時から竜一に想いを寄せていた。

市大会終了後に竜一に告白され、めでたく交際中。

サブヒロイン的な存在。

筒井綾香：

サブヒロイン的な存在。

陸上部の一年生。

200mで市大会を勝ち抜き、同じく皆と練習中。

竜二と笹山にサプライズパーティを仕掛けたり一人をくつつけようと仕向けたりするかなりのイタズラ好き。

現在、片桐翼と交際中。

髪型は笹山より長めでつぶらな瞳が印象的。

この瞳で翼を魅了しているらしい。

三月廉太郎：

陸上部の一年生。

リレーメンバーの一人。

外見は「キャラ男」

天性の才能を持つておりスタートダッシュがかなり速い。
そのため一走に一年生なのに任命される。

笹山に告白してフラれた。

日高怜：

陸上部の一年生。

少し暗い印象が強い。

すば抜けて目立つではなく、縁の下の力持ち。

何度失敗しても黙々と練習する。

リレーメンバーの一人で四走。

加速走をやらせたら竜一や翼でも追いつけないほどの加速力を持つ。

姉貴：『斎藤彩子』

竜一の姉であり竜一の良き理解者。

弟からの相談を親身に聞いてくれる。

そのため、竜一からもかなり信頼している。

竜一をサポートしてくれる大事な役目。

牧野尚也：

竜一と翼のクラスメート。

どのクラスにも一人は必ずいる「お調子者」。
新藤瑞穂と幼馴染である。

柏山修一：

同じく竜二たちのクラスメート。
かなりの毒舌で有名。
論理的に口論する姿がよく見られる。

その論理的思考をかわれてかバスケ部の部長を務める。

新藤瑞穂：

同じく竜二たちのクラスメート。
牧野尚也とは幼馴染である。
気が強い方で牧野に強烈なツッコミを入れる場面が多い。
これから鍵になる人物かも・・・？

以上が主要な登場人物です。

わからなくなつた時に参考になれば幸いです。

わからなくなるような書き方にならなければ一番良いのですが・・・
^ ^ ;

第一十一話・ドタバタスキーニの幕開け

「…………よつ…………るよつ……！」

「起きるよつ……！」

翼に顔を強めに叩かれて意識が戻る。

いつの間にか寝ていたようだ。

叩かれた方の頬が痛い。

「竜二、お菓子タイム終わっちゃったぞ？ 楽しかったな～。」

翼が牧野と柏山に問い合わせると一人同時に頷く。

「そりそりー 竜二つたら何度も起きこしても全然起きないんだもん
ー！」

どうやら柏山が起こそうとしてくれたらしい。

そんなに寝起きが良かつたら何回も遅刻したりしない。

まだ頭がはつきりしない中、突然頭上から声がした。

「もつそろそろスキー場に着くっぽいよ?」

ପ୍ରକାଶନ

俺も隣に座っている翼も驚いた。

真上から見下ろすように新藤がいるではないか。

「何そんな驚いてんの？」
「ずつといたじゃない。」

「アーニー、おまえがアーニーだよ。」

そんなやりとりをしているうちにスキー場へと到着した。

周りはほとんどが雪を被つていて真っ白。

これが所謂「銀世界」なのだろう。

担任からインストラクターの先生の紹介をされるとそれぞれ班ごとに分かれた。

この行事は一年生の交流も趣旨に入っているため一年も一年も混ぜだ。

(えーっと、俺の班は・・・。)

男子は俺と牧野と柏山と翼。
さつきとまつたく同じ面子だ。

女子は・・。

新藤に筒井に香織。それに同じクラスの天野。
天野は新藤と仲がいいらしい。
まったく話した事は無いけど・・。

突っ込みどころ満載の面子である。
ここまで揃いすぎると逆に怖い。

まあ、とうあえず脅威の幸運に感謝した。

さすがの翼たちでもこんな時までくつついてたりはしないだりつと思つたが

：

気づいた時にはもう一人でキャツキヤと騒いきました。

見てる二つかの方が恥ずかしくなるくらいに。

そんな翼たちに冷ややかな田線を送りつつインストラクターの話を聞いていた。

といふか聞いてないと絶対に転ぶ。
俺はスキーはまったくの素人。

一通り説明が終わり、さっそく滑る事に。

ズテン。

・・・・・こけた。

いきなりズテツと。

しかも香織の目の前で。

みんなに笑われてしまった。

翼や牧野なんて笑いすぎだらつてほど笑ってる。

香織も笑っている。

激しい自己嫌悪が襲ってきた。

このまま端っこでいじけていたい。

今の俺はどうす黒いオーラを纏っているに違いない。

「せひつ、つかまつて?」

香織が笑いながらも手を差し伸べてくれた。

情けなれと恥ずかしさでなんともやつ切れないと気持ちになら。

「」「めん・・・。」

香織の手につかまつてよつやく立ち上がった。

その瞬間。

ふざけた牧野が調子に乗つて俺の背中を押した。
押した先は斜面。

香織が斜面を背にして立つている。

「ちよー、お、ば、馬鹿ー、わわわわー。」
俺のスキー板はまづ事を聞かずに滑る。

「あーー、いや、壇ーー、危ないー。」

と香織が叫んだ瞬間

：

バタン！

なす術も無く一人とも後ろに倒れてしまった。

「痛たたた・・・。」

「痛つてえ・・・。」

一人とも呻くよじに声を上げる。

とつぞに香織を庇つて受身をとつていたらしい。

俺が下になつている。

のまま倒れいたら香織が俺の下敷きになつていただろう。

体育の受身を真面目にせつていてよかつたと思つ。

瞑つていた目をゆつくりと開けた。

「……」

田の前に香織がいるではないか。
まあ、当たり前の事実だけだ。

でも田と田の近で、10cmもない。
漫画みたいな感じ。

心臓がドキドキしてるのが聞こえてしまつた。

とこりか・・・。

もつらし勢いが強かつたら唇が当たつていたと思つ。

しかもひつくり返すより受身を取つたから俺の手は香織の胸中に。

わかりにくこと思つが簡単に膚を抱き合つ感じ。

転んだ恥ずかしさと同じようなシチューションになってしまった恥ずかしさでそのまま泣けてしまいたく思った。

「・・・」

みんな畳然としている。

真っ白になつた頭がようやく戻り抱いていた手を離す。

「『』、『』めん・・・怪我、してないか?」

「うそ・・・平氣だよ。」

ゆっくりと立ち上がり立った。

「バカ尚也ーー！ 怪我してたらジーさんによーー！」

新藤が思いつきり怒鳴る。

「・・悪い。」^{わり}めんな。」

「の大馬鹿もようやく状況を察知したか。

「あ、だいじょ・・「もつ少し考えなさいよー。一人とも県大控え
てるんだよ?ー。」

俺が意思表示をしようとしたら思いつきついでござられてしまった。

「ホントじめん。でもよ、なんでお前にそこまで言われないといけ
ないんだよ!」

「だつてこれで怪我してたら尚也、どうなつてたかわかつてるの?
!」

「うせえな!だからさつきからずつと謝つてるじゃねえかよ!
! 大体お前は幼稚園の時から

…

こつちはこつちで痴話喧嘩が始まつてゐるし。

「まあまあ。落ち着けつて。俺も、香・・笠山も大丈夫だからさ。
いつものクセで名前で呼びそつになつた。

言い争いを続ける二人の間に入ろうとする。

「私も大丈夫ですから・・喧嘩はやめましょ？」
香織を体勢を立て直して仲裁に入る。

が、二人とも聞く耳を持たず。

翼と筒井は俺と香織を気遣つてからはこの二人の事はまったく気に
していないし・・。

天野は天野であたふたしてゐるだけ。

もうほっとひづ・・。

いきなり波乱万丈だがこつしてドタバタの3日間が始まった。

本当にこんな調子で大丈夫なのだろうか・・・?

第一十一話・ドタバタスキーニの幕開け（後書き）

更新間隔が空き過ぎてごめんなさい。

卒業式やら何やらで結構忙しかったです（汗

言い訳にしか聞こえないかもしませんが^ ^ ;

第一十一話・到着

「つ・・疲れた。」

体のあちこちが痛い。

あれから一時間ほどスキーの講習があった。

何回いけたのだろ？

多分班の中で一番いけたと思う。

その度にみんなに笑われた。

しかも転んでる時に写真まで撮られたり。

散々な目にあった。

これが後、二日間も続くのか。
なんだか憂鬱になつてくる。

スキー場から宿舎に着くまでの間そんな事を考えていた。

バスはどんどん山の奥へと入っていく。

くねくねと曲りくねつた道ばかりがあるので酔いそうになつた。

ようやく宿舎に到着。

結構大きな宿舎である。

そりや三年生以外の生徒全員が泊まるのだから広くないとダメだが。

担任がまた何か叫んでいる。

「今から部屋の場所を説明するから責任者は取りに来いよ。」

そういう事前に班を決めてたつけ。

俺らの部屋の班は俺・翼・牧野・栢山・日高・三月の六人。
またこの面子かと思うともう笑うしかない。

確か責任者は翼。

たまにはやるか、と思い責任者に立候補したが朝寝坊しそうだから
と言われ満場一致で同じく立候補していた翼に決定。

そんなに俺つてだらしないか？

「あ、俺らの班の部屋決まつたから。」
担任の元から翼が戻ってきた。

「俺らはほい。藤の間。」

宿舎の案内図を見つけ、一番角の部屋を指差す。

「やつた！ 一番端じゃん！ 先生達あんまり来ない！」

牧野と三月が騒ぐ。

この一人はどうやら馬が合ひひじー。

ほとんど会話などした事が無いはずなのに早くも打ち解けている。

まあ、類は友を呼ぶとか言つしな。

「あんまり簡単に考えない方が良い」と思つよ。端とかつて結構先生達も曰、付けるつて言われるし。」

柏山がすかさず厳しい突っ込みを入れた。

こいつは言いたい事をズバズバと言つてくれるから結構気分が良い。

言われる側になるとイラつとくる時もあるけど。

「まあまあ。来ないに越した事は無いんだからさ。気楽に行こうっ。」
翼が柏山を諭すよつと云ひ。

「そうすよ！ 片桐先輩ナイス！」

三月もそれに同調する。

柏山もいつもどおり反論していくかと思つたがやはり頭の回転が速い。

この一人と争つても無駄だとわかり不貞腐れているだけだった。

「とりあえず荷物、部屋に置きませんか？」
ずっと黙っていた日高が皆に提案をした。

確かにその通りだ。

辺りを見るともう他の班はそれぞれの部屋へと散らばっている。

俺たちも部屋に向かつ事にした。

「はあー・・疲れた・・。
全員荷物を無造作に下ろす。

12畳くらいの部屋に押入れとベランダに出る窓が一つずつ。

入り口の所にトイレス一応あった。

「夕飯は風呂の後。それまでは自由時間で良いってさ。」
「クラスずつ入るが時間がかかる。

「じゃあ、トランプでもやるー。俺、きりんと持ってきたからー。」

牧野がガサゴソと自分の鞄を漁る。

鞄の中身が一瞬だけ見えたが遊ぶ物ばかりだった。

「こいつの頭の中には遊ぶ事しかないのだろつか？」

そして俺たちは定番である「大富豪」をやる事になった。

もちろん罰ゲーム付きで。

第一十一話・到着（後書き）

罰ゲームをどんなににするか思案中です（笑）

定番の罰になっちゃうかもしませんが＾＾；
無い頭を振り絞って考えてみます。

第一二三話・キッシー闘ゲーム（前書き）

「大富豪」とこゝのはトランプのカードゲームの事です。

ジョーカーが一番強く、順番に2、1、13・・・3となっています。

同じカードを一枚・三枚と同時に出す事も可能。

ちなみに「8切り」「スペ3」「革命」はローカルルールなので無い所もあると思います。

8切り・・・8を出すとそのまま切る事ができ、新たにカードを出せる。

スペ3・・・ジョーカーが出た場合、スペードの3を出せばジョーカーを切る事が出来る。（スペ3は無にしてあります）

革命・・・3を4枚だと同じカードを4枚一気に出すと革命となりカードの強さがすべて逆転する。

第一二三話・キッシングゲーム

田の前に次々とカードが出されしていく。

もつすぐ上がる人が出ても良い頃だ。

「はい。」

田高が出したのは『12』だ。

「あー、てめーー！ 12とか大きすぎだらー・・・。パス。」
翼が自分の手札と睨めっこしながら前に出されたカードにいちやもんをつける。

「そりゃナイト。パス。」

三月も頭をグシャグシャと搔きながら嘆ぐ。

俺の番だ。

「こは一気に賭けに出てしまおつ。

一位になれば罰ゲームは思このままで。

自分の中に秘めていたSの部分に気がついた瞬間であった。

「いけつー。」

そう言つて俺が出したカードは『2』。

このゲームにおいて一番強いカードだ。

ちなみにこのカードを切られたらお仕舞いである。

なぜなら残り一枚となつた手札のカードはこのゲームで一番弱い『3』だからだ。

一瞬、場がしらけた
なんだこの空気は？

みんながお前、空氣読めよーとでも言つたげな皿をしてくる。

誰もが俺の方をジトーッとした田線で見つめてくる。

俺、何か悪い事したか？！

そのひんやりとした空氣を打ち碎いたのはやまつこつであった。

「やつたー！ ジョーカーーーー！」

牧野が高らかに叫ぶ。

「・・・ああああ～！～！」

このカードの存在をすっかり忘れていた。

大富豪において『2』は最強を誇るがジヨーカーには勝てないのだ。

まてよ。

という事は・・・？

残った手持ちのカードは最弱である『3』だ。

「負けたああ～！！！」

罰ゲーム決定の瞬間だつた。

途轍もない敗北感に襲われる。

まだ『革命』と云つ可能性もあるがそんな可能性は無いに等しい。

「いつなつたら日高が一位になってくれる事を祈るしかない。
日高ならキツイ罰ゲームはしなさそつた気がする。」

「よひしゃー！ 牧野ナイス！…」

「牧野、よくやった！」

「先輩あつがといひ」ざれこめす…。」

みんな口々に歓喜の言葉を発する。

「田高、頑張ってくれ
…！」

それから2～3分経つただろうか。

「よしハーパー上がり！」

上がったのは柏山であった。

最悪だ。

ここにはハーパーである事でも有名。

罰ゲームを決める役なんてやらいたら向をやらされるとわからぬ。

柏山が上がってからみんな上がっていった。

「さあ～。罰ゲームは何にしようかな～。」

不気味に微笑む柏山の姿は悪魔か何かだと心底思った。

思わず俺は息を呑む。

「じゃあ、やつらのロビーの真ん中で『香織～！好きだ～！』って

言つて。」回。」

「お、おこー。」

「ああ、もちろん大声で。みんなこの部屋にいるから聞こえなかつたらやり直しね。」

「馬鹿！　他の人に迷惑になるだろー。」

まつたぐいの悪魔は何を言い出すんだ。

「いやいや。この宿舎、いつの学校しかいないから平氣だよ。女子は上だし。」

黙り込むしかなかつた。

そういう問題じやなくて！　とか突つ込めばよかつたのだろうがこいつに何を言つても無駄だ。

なんでこいつが一番になつてしまつたのだろー。

なんで俺は馬鹿な賭けに出でしまつたのだろー。

すべてを恨めしく思い、ロビーへとトボトボ向かう。
他の5人の熱い目線を受けながら。

まともだと思っていた日高もいつの間にかみんなに感化されてしまつていて。

まずは辺りをキョロキョロと見回す。

幸いホテルでは無かつたためフロントのようなものは無い。

- ・・ロビーには誰もいない。
- もう覚悟を決めよう。

「香織い～！～！ 好きだー！～！」

思い切り叫ぶ。

恥ずかしくて死にそう。

部屋の方向を見ると柏山が人差し指を突き立て口パクで「もう一回」と言つてくる。

あいつ、本当に正気か？

「香織っ……！ 好きだー……！」

言い終わるとダッシュで部屋に駆け込む。

今ので辺りはざわついている。

みんな犯人は誰か、とキヨロキヨロとしている。
もちろん爆笑している者が多い。

そんな好奇心旺盛な目で探さないでくれ、と願うばかりだった。

そんな騒ぎを聞きつけた担任や他の先生がロビーに来たようだ。
無事に部屋に戻る事が出来た俺は肩で息をする。
呼吸が無性に荒い。

「はあ・・はあ・・お前、本当にこんな事をさせやがって・・・」

全員爆笑している。

牧野と翼なんてスキー場で転んだときよりも笑っている。

ずっと腹いてーだとか喚いている。

こっちの気も知らないで。

この二人は俺がどれだけ恥ずかしい思いをしたかわかつているのだ
らうか。

多分わかつていないのであろう。

と、そのとき。

バタバタッ！ バタンッ！

勢い良くドアが開かれた。

「今、馬鹿な事をした奴は誰だ？！」

学年主任の先生が鬼のような形相で怒鳴っている。
この事件の発端がバレたらどうなるかわからない。

「俺たちばこじでずっと荷物整理をしてただけですよ？ そしたらさつきの声が聞こえて・・・。」の馬鹿が荷物を全部ひっくり返しちゃつたんですよ。」

栢山が機転をきかせていけしゃあしゃあと在りもしない嘘をつく。この馬鹿が、という所を強調して牧野の頭をペしペしと叩く。

いきなりそんな事をされて不服そうだったが状況が状況だったので黙っていた。

こんなときに頭が回る奴は羨ましい。

トランプは片付けてあり、荷物が牧野のおかげでグチャグチャだった事が功を奏した。

「どうか、悪かったな。」

一言だけ言い残して先生は去っていった。

5秒ほどの沈黙

「あー！ びっくりした！ 栢山もよくあんな事を簡単に・・・。翼の口から安堵の息が漏れる。

「栢山先輩、流石ですね！ すごいっす！」

いつもは無口な田高もよつやく慣れてきたようだ。

「ひでえなあー。俺を悪役に仕立て上げちりやつてさー。」
牧野だけがブーイングをしている。

そりや、あんな役をいきなり押し付けられたら誰だって文句を言つ
だろう。

「まあ、切り抜けられたからいいじゃないですか！ 先輩の罰ゲー
ムも面白かったですし！」

三月は思い出し笑いを堪えているのがバレバレである。
まったく酷い後輩だ。

「とりあえずよー。さつさと片付けて風呂行かねえ？」
またさつきの事で爆笑されそうだったので話を逸らす。

「せうだな。また学年主任に怒鳴られるのもアレだし。」
この状況で翼がフォローしてくれた。

地獄に仮とはこの事だろう。

「よしそー！ 決まり！ 行こーーー！」

俺たちはまず散らばった荷物を片付ける事に。

それから風呂だ。

何事も無く終われば良いけど・・・。

第一二三話・キッシー罰ゲーム（後書き）

罰ゲームも案外普通のものになつてしまつたかと思います（汗
柏山のどうづぶりが合間見えたかとへへ；
更新間隔が空いてしまい、申し訳ありませんでした。
評価・コメントも増えて嬉しかったですへへ

第一十四話・待ちに待つ消灯時間！

風呂も夕飯も特に大きな出来事もなく終わった。

相変わらず牧野はうるさかつたけど。
まあ、たまにはいいだろ？

香織たちも香織たちで楽しくやつてるみたいだし。

いよいよ消灯時間。

林間学校や修学旅行と言つたらこれからが楽しみの一つだろ？
布団を敷き、とりあえず寝る準備は終わった。

先生達に怒られないための建前でしかない。

「何する？ 何する？」

ワクワクした田でみんなに呼びかけるのはやはり牧野だった。

「あ、悪い。^{わい}ちょっとメールチェック。」

徐に鞄から携帯を取り出す翼。

もちろん許されているはずがない。

まあ、俺たちの間では「暗黙の了解」みたいになっちゃってる。
本当はよくない雰囲気なんだけれどね。

とか言いながらちゃんと俺も持ってきてるから人の事はいえない。

少しの間みんなでメールチェック。

「なんだよなんだよ。みんなして携帯いじりちゃってー。」

持つてきていない牧野が不貞腐れて拗ねている。
本来ならばこいつが正しいのだけど。

俺もなんだかんだ言つてメールチェック。

香織から一件。

業者メールが一件来ていた。

「さっきの声、竜二？！ びっくりしたー。罰ゲームか何かだろう
けどもうやめてよね！？ ずーっと冷やかされっぱなしだったんだ
からー・・・。」

やはり聞こえていたらしい。
・・しかもちょっと怒り気味だ。

そりゃあんな事されれば誰だつて怒る。

丁寧に謝罪の言葉を入れて返事をしておいた。

全員メールチェックは終わった。

「よしー、何するー？」

端っこで拗ねていた牧野が途端に元気になる。

「いじつ時はやっぱ恋バナっしょー。」

今度は翼がハイテンションになる。
また彼女自慢に発展するのだろう。

「でもやー、翼と竜一は聞いても面白くない?
みんな知ってるんだし。」

柏山が思いつきり突っ込む。

「こいつは悪氣があつてやつているのだろうか?
しかも俺も翼と同レベル扱いだし。

俺はあいつほど彼女自慢はしていない……はず。

「まあまあ。気にせずにやるー。」

牧野は早く騒ぎたいようだ。

「じょんけんで負けた奴からな？　じょんけーん・・・」

「じょんけんで負けた奴からな？　じょーんけーん・・・」

「ポンシ！」

負けたのは・・・。

「やつた～！　竜一の負け～！」

大袈裟すぎるんだが、と突っ込みを入れたくなるほど牧野は騒ぐ。
ところがここに「恋愛」の一文があるのだろうか？

「じゃあお忽氣話をしてもらおつか。」

翼と植山は一いやーいやーといふ顔を見ている。

「先輩！　期待しますよ！」

田高といい田も興味津々のようだ。

また俺か・・・。

全員パーを出していて俺だけグー。

一人負けというのはとても惨めで無様だと改めて思い知った。

「大体、何を話せばいいんだよ・・・。」

一人でぶつぶつと呟く。

「じゃあ、俺たちが色々と質問するから答えばいいよ。」

またしてもあの「悪魔」が不気味な笑みを浮かべている。

「何を質問させてもらおつかなー・・・？」

どうやら「J」には眼鏡で本性を隠した「鬼」もいるようだ。

ホント勘弁してくれよ

：

同口…就寝準備中…一階・女子部屋

「嘘つ？！ わたしの本当に斎藤だったの？！」

同じ部屋の新藤先輩が驚く。

「はい…今わざと返事が来て謝りました…。」

私も相当驚いた。

だって竜二がいきなりあんな事言つとは思わなかつたし…。
「香織」なんてよくある名前だから他の人だと思ったのに。

「ほりつー… やっぱり先輩だつたじゃん！ 一人とも仲良いねえ～
！ 」

さつきから綾香はずーっとニヤニヤしたまんま。
綾香に冷やかされて私は顔から火が出るほど恥ずかしかった。

帰つたら竜一に思いつきりばかって言つてやる……。

「でも・・ちょっと羨ましいかも・・。」

天野先輩が新藤先輩の後ろで微笑む。

ちなみに私たちの部屋は私・綾香・新藤先輩・天野先輩の四人。
女子は人数が少ないので一部屋ごとの人数が少ないんだつけ。
優しくて話しやすい先輩でよかったです。

一年生同士・二年生同士を決める時は自由だった。
けど一年生と二年生をくつつける時になるとくじ引きになる。

一年生のちょっとギャル系の人とか苦手だもん・・・。

「あ、そうそう。新藤先輩つて堅苦しいから瑞穂でいいよ。タメ語
もOK。唯もいいよね？」
「うん。その方がいいかも・・・。」

いきなり先輩を名前で呼ぶつて・・。
しかもタメ語つて。

竜一と片桐先輩はちょっと特別だけど。

「はーい！ じゃあ瑞穂に唯。改めてよろしくー。」

綾香の順応性が物凄く羨ましい。
でも合わせなきゃ。

「よしひー。」からりんがよろしくー。ー。

「よろしくね。」

新藤せ・・・じゃなくて瑞穂と唯が大きく頷く。

布団も敷き終わつたし後は消灯。
もちろん起きてると思うけど。

「何を話そつかー？」

みんなで布団に寝そべりながら綾香が問いかける。

「やっぱ恋バナっしょ！ 一人の話を聞きたいしー。」

そう提案したのは瑞穂だ。

けどこいつ時つてやっぱ恋バナか怖い話だよね。

・・怖いのは苦手だけど。
遊園地ですごい事になっちゃったし。
あの時は偶然竜一の手を握っちゃって、頭真っ白になっちゃって・・
。

思い切って「握つていい?」「って聞いたらOKしてくれて。
すっごく恥ずかしかったけど本当に嬉しかった。

竜一のあつたかくて大きな手を握つてると安心出来たもん。

「香織つ? デリしたの?」

いつの間にかボーッとしたみたい。

「うん、ちょっとと考え事してた。」

適当に言い訳しておかないとまたからわれちゃう。

「そつかあ。じゃあ恋バナしよー!」

今回は綾香を誤魔化す事が出来た。

綾香、鋭いからいつも竜一の事を考えてるだけちゃうんだよね。

「誰から始める〜？ たまには唯から？」

「えつ？ 私から？？」

明らかに動搖している。

恋してるんだ。

なんか後輩の私が言つのも変だけれど、可愛い。

「いやいや、いは言いだしつぺの瑞穂からでしょ〜！」

綾香がわざわざ私に向けたニヤニヤを瑞穂に向ける。

「もう！ しょうがないなあ・・・。内緒だよ？」

「はーい！！」

いつして私たちは恋バナをする事になった。

・・・瑞穂と唯の恋バナ、ちょっと楽しみだな。

第一十四話・待ちに待つ消灯時間！（後書き）

悪い子の集団で「めんなさい」；
初めて香織視点で書いたと思います。
なので可笑しな点も多々あるかと（汗）

少しの間竜一と香織の視点を分けて書きます。

次は瑞穂の恋バナから・・・。

第一一十五話・悲しげな瞳

「で、何を言えばいいの？」

観念しました、とでも言いたげな顔をしながら瑞穂は頃垂れている。

「うーん…じゃあ、好きな人いる？」

綾香がストレートに聞く。

まあ、恋バナといったらまずはこれでしょ。
瑞穂の好きな人、結構気になるし。

「…・・・いる。」

私は綾香と嬉しそうに笑う。

瑞穂つて印象としてサバサバした性格で男子なんて一つてキャラに見える。

だから余計に気になつてたんだけどね。

「私もそれ、初めて聞いた・・・。」

唯も驚きの表情を隠せないでいる。

この一人つて普段恋バナとかしないのかな?
私たちはほぼ日常的にしてる気もするけど・・。

「あんまりこりうう話はしないからねー。」

「で、誰?誰?」

綾香が瑞穂に問い合わせると少しの間、黙ってしまった。
私も綾香も唯も興味津々になつてゐる。

「…………尚也。な、内緒だよつ?」

慌てて口止めをしつゝいる。

尚也・・・?

誰だけ。

「えっと・・尚也って、牧野の事?」

唯が確かめるように聞く。

「・・・つと。」

牧野つてあの牧野先輩?

竜一がよくいふところをいつて聞いてゐる。・・・
あんまし面識無いけど。

スキーの班で一緒にいたつづけ。

「そうだったんだあ・・・。」

唯が目を見開いて納得している。
けどなんかピンと来ない。

綾香も畠山としてるだけだし・・・。

「わ、悪かったね！ 面白くなくて！」

反応が微妙だったからか瑞穂は拗ねてしまった。

なんと声をかけたらいいかわからずにまた沈黙が続く。

「・・・幼馴染なの。」

急に瑞穂が話し始めた。

「昔からあいつ馬鹿ばっかしやつててね。いつも私、からかわれてた。でもね、小学校の頃に私、いじめられてた時があつて。その時にいきなり『こいついじめてる奴は俺が許さない！』って言って

主犯格の子に殴りかかっていった。今度は自分がいじめられるかも知れないのにね。そしたらあいつ、『俺が守つてあげるから』って。

「

瑞穂の顔はどこか悲しげで寂しい感じがした。

「馬鹿だよね。臭い台詞言つてカツコつけちゃつてさ。でもあの時のあいつ、すつじく頼もしかった。・・・結構カツコよかつたし。ホントよくある話だけどね・・・。」

全部話し終えると瑞穂は一息ついた。

なんでこんなに悲しい顔をしてるんだろう・・・?
どうしてこんなに寂しそうなんだろう・・・?

自然とみんな悲しい空気に入れていく。

私はそんな中、閉ざしていた口を開いた。

「いい話だね・・・。でもどうして瑞穂はそんなに悲しそうなの・・・?
?」

唯も綾香も軽く頷く。

「・・・あいつ、好きな人いるんだってさ。」

ははは、と瑞穂は軽く笑っている。

「前に聞いたの。そしたら『ずっと好きな人がいる』って。」「

・・・それって。

それってもしかして。

「ま、牧野先輩、他には何か言ってなかつたの？」

今度は綾香が尋ねる。

「えつとね、『めっちゃ 可愛くてモテそつだから絶対に振り向いて貰えなさそう』って言つてた。」

やつぱり。

牧野先輩も瑞穂の事が好きなんだ。

瑞穂、すっごく可愛くてモテそつだもん。

スラつとしてるし顔もすつきりしてて私みたいに一キビとか無いし。和服が似合いそうで清楚な感じ。

それに「ずっと」好きな人なんだから・・・ね？
幼馴染である瑞穂が確立高いでしょ。

瑞穂、鈍感なのかな。

「それって向こういつも瑞穂の事、好きなんじゃないの？」

三人同時に同じことを言った。

やつぱりそういう想ひよね？」

「や、そんなわけ……！ 私なんか……」

顔を赤くして首を思いっきり振っている。

「瑞穂、もうちょっと自信持ちなよー。可愛いんだからセー！」

しょぼんとしている瑞穂を私は慰める。
といふか、瑞穂が可愛くなかったら私なんて……。
人の事まったく言えないけど。

「……ありがと。ちょっと自信ついた。」

照れるように笑う。

この笑顔、うるやましいな。

「じゃあ、次は誰行く？！」

私たちの恋バナはまだまだ続くのであった

：

第一一十五話・悲しげな瞳（後書き）

更新間隔をあがめました（汗

これからはもう少し更新できるようになります。

アイデア不足をどうにかしないと…；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5685d/>

不器用な俺。

2010年11月14日09時21分発行